

Title	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2014
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2014. 2015, p. 1-71
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/89250">https://doi.org/10.18910/89250</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

科学技術イノベーション政策における  
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学  
公共圏における科学技術

活動報告

2014

# 目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか .....	1
1. 教育プログラムの実施 .....	5
• 大阪大学の取組 .....	6
• 京都大学の取組 .....	13
• 合同講義 .....	19
• 阪大学生の声 .....	23
• 京大学生の声 .....	25
2. プログラム推進委員会の運営 .....	27
• 実施体制 .....	28
• アドバイザー会議 .....	29
• カリキュラムの発展及び拡充 .....	29
• 研究会やイベント開催の企画及び調整 .....	31
3. 拠点間共同プログラムへの参画 .....	33
• サマーキャンプの設計・運営 .....	34
• 共催：国際シンポジウム 2014 .....	37
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施 .....	39
• 共催：科学技術政策セミナー .....	41
• 共催：「シリーズ：適正技術」 .....	43
• 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会） .....	46
• RISTEX 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発） .....	50
5. 関西ネットワークの発展 .....	51
• ラボカフェ .....	52
• 京大拠点主催：政策のための科学イベント .....	56
6. 国際連携の推進 .....	57
• 国際連携 .....	58
• 海外調査及び発表等 .....	59
7. 政策のための科学に関連する活動（研究業績等） .....	61
• 大阪大学 .....	62
• 京都大学 .....	66



## はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きてみたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものであります。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きてみたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きてみたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者

のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学及び京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表 小林傳司 (大阪大学)

## ❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere : STiPS）」は、大阪大学及び京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

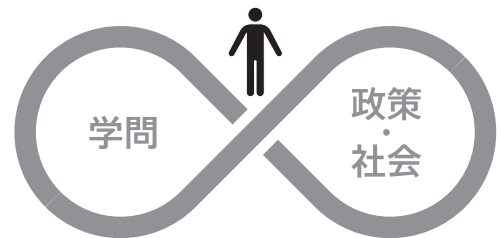
STiPSでは、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



### 教育拠点としての STiPS

STiPSでは、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



### 研究拠点としての STiPS

STiPSでは、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

### 実践拠点としての STiPS

STiPSでは、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2015年3月現在）

大阪大学

小林 傳司	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	教授	科学哲学、科学技術社会論
星野 俊也	大阪大学大学院国際公共政策研究科	教授	国際関係論、国連研究、米国外交、国際安全保障論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学未来戦略機構	特任教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	教授	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
神里 達博	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任准教授	科学史、科学技術社会論
山内 保典	大阪大学全学教育推進機構	講師	認知心理学、科学技術社会論
渡邊 浩崇	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任講師	国際政治学、外交史、宇宙政策
辻田 俊哉	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任助教	国際政治学、国際安全保障論

京都大学

川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学国際高等教育院	教授	可視化
小寺 秀俊	京都大学大学院工学研究科	教授	マイクロTAS/MEMS
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
カール・ベッカー	京都大学こころの未来研究センター	教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
新山 陽子	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経営学、食品安全、リスク認知
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
高野 潔	京都大学学術情報メディアセンター	教授	情報通信政策
中澤 正彦	京都大学経済研究所	特定教授	金融政策と日本経済、財政政策
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
後藤 励	京都大学白眉センター	准教授	医療経済学、医療政策
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
久木元 伸如	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定講師	ユーザインタラクション
堀 さやか	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	地球環境学、水ガバナンス





# 1. 教育プログラムの実施

---

# 1. 教育プログラムの実施

## ❖ 大阪大学の取組

### 大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位及び選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生及び 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目 2 単位及び選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。

## 本プログラムの科目

科学技術  
イノベーション  
政策概論

ナノ  
テクノロジー  
社会受容  
特論 A

ライフ  
サイエンスの  
倫理と  
公共政策

産業環境  
マネジメント  
論

科学技術  
社会論基礎

社会における  
科学技術  
理論・質的調査  
・事例研究

フィールド  
調査法特講

人事  
マイクロ  
データ分析

研究  
プロジェクト

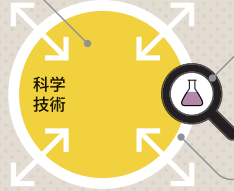
### 科学技術イノベーション

科学技術イノベーションを生み出し、社会に応用するプロセスで、何が起こるのでしょうか。そこで配慮すべきことについて、専門家と共に考えていきます。

### 公共的問題

科学技術は公共政策の観点からは、どのような役割を果たすのでしょうか。具体的な事例を題材に、それらを読み解く素養を修得していきます。

公共圏



### 研究法

公共圏における科学技術のあり方を分析するためにどのような理論、概念、方法があるのでしょうか。それらを学び、自ら研究やイベントに取り組みます。

### コミュニケーション

科学技術に関する公共の問題について、誰か何を主張しているのでしょうか。コミュニケーションの現場に身を置くと同時に、自身も議論に参加していきます。

科学技術と  
コミュニ  
ケーション

公共政策 I

環境法

開発と環境

生命倫理と  
法

科学技術と  
社会特論  
ホットイシュー

科学技術  
イノベーション  
政策特別演習  
ディスカッ  
ション型授業

科学技術  
イノベーション  
政策総合演習  
全拠点合同  
セミナー

## 大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

### 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）

2013 年度

履修登録者数：15 名（所属研究科—文学：1 名、人間科学：1 名、法学：1 名、理学：5 名、  
薬学：1 名、工学：2 名、基礎工学：3 名、生命機能：1 名）

修了者数：2 名（進路—民間企業：2 名）

2014 年度

履修登録者数：11 名（所属研究科—人間科学：1 名、理学：1 名、医学系：1 名、工学：3 名、  
基礎工学：1 名、国際公共政策：1 名、生命機能：3 名）

\*2014 年度の在籍者数の合計：23 名

修了者数：4 名（進路—政府・公的研究機関：2 名、民間企業：2 名）

\*副専攻プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、14 単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

### 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）

2013 年度

履修登録者数：8 名（所属研究科—人間科学：1 名、理学：2 名、医学系：3 名、国際公共政策：1 名、  
生命機能：1 名）

修了者数：0 名

2014 年度

履修登録者数：12 名（所属研究科—人間科学：1 名、理学：1 名、工学：4 名、基礎工学：3 名、  
国際公共政策：2 名、生命機能：1 名）

\*2014 年度の在籍者数の合計：19 名

修了者数：3 名

\*高度副プログラムの修了証は、学生が高度副の 8 単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、8 単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2014 年度）

科目カテゴリー	開講部局(課程)	授 業 科 目 名	主担当教員	単位	学期	
入門必修科目(2単位)	CSCD(院)	科学技術イノベーション政策概論 (2013年度新設科目)	神里達博ほか	2	1	
連携必修科目(2単位)	CSCD(院)	科学技術イノベーション政策特別演習 (2013年度科目名称変更)	八木絵香ほか	2	1	
必修科目(2単位)	CSCD(院)	研究プロジェクト (2013年度新設科目)	小林傳司ほか	2	通年	
選択科目： 8 単位以上（選択科目 I および II から、それぞれ 2 単位以上を履修）	選択科目 I： 基軸科目群	CSCD(院)	科学技術とコミュニケーション (2013年度新設科目)	平川秀幸ほか	2	1・2
		CSCD(院)	科学技術社会論基礎 (2013年度新設科目)	小林傳司ほか	2	1
		CSCD(院)	科学技術イノベーション政策総合演習 (2013年度新設科目)	小林傳司ほか	2	1
		人間科学研究科(博士前期)	フィールド調査法特講	森田敦郎、木村自、宮原暁	2	1
		人間科学研究科(博士前期)	社会における科学技術特定演習 (2013年度新設科目)	山中浩司、森田敦郎	2	2
		法学研究科(博士前期)	総合演習(トランスプロフェッショナルリテラシー) (2014年度追加科目)	福井康太、西本実苗	2	2
		工学研究科(博士前期)	サステナビリティ評価・技術論 (2014年度追加科目)	東海明宏ほか	2	1
		基礎工学研究科(博士前期)	科学技術移転論 (2014年度追加科目)	草部浩一	2	2
		国際公共政策研究科(博士前期)	公共政策 I	星野俊也、多胡圭一	2	2
	選択科目 II： イシユウ科目群	CSCD(院)	科学技術と社会特論 (2013年度新設科目)	平川秀幸、神里達博ほか	2	2
		法学研究科(博士前期)	総合演習(生命倫理と法)	瀬戸山晃一	2	2
		法学研究科(博士後期)	特定研究(生命倫理と法)	瀬戸山晃一	2	2
		医学系研究科(博士前期)	ライフサイエンスの倫理と公共政策 (2013年度新設科目)	加藤和人、吉澤 剛	2	1
		工学研究科(博士前期)	産業環境マネジメント論	東海明宏	2	1
		工学研究科(博士前期)	ライフサイクル工学 (2014年度追加科目)	福重真一	2	1
		工学研究科(博士前期)	都市デザイン論 (2014年度追加科目)	小浦久子	2	1
		基礎工学研究科(博士前期) (ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供)	ナノテクノロジー社会受容特論A	阿多誠文、伊藤正、小川久仁	2	1
		国際公共政策研究科(博士前期)	環境法	松本充郎	2	1
		国際公共政策研究科(博士後期)	特殊研究(環境法)	松本充郎	2	1
		国際公共政策研究科(博士前期)	特殊講義(開発と環境)	大槻恒裕	2	2
		国際公共政策研究科(博士後期)	特殊研究(開発と環境)	大槻恒裕	2	2
		国際公共政策研究科(博士前期)	プロジェクト演習(科学技術とソーシャル・エンタープライズ) (2014年度追加科目)	星野俊也ほか	2	2
		国際公共政策研究科(博士前期)	特殊講義(人事マイクロデータ分析1)	松繁寿和	2	通年
		国際公共政策研究科(博士後期)	特殊研究(人事マイクロデータ分析3)	松繁寿和	2	通年
		グローバルコラボレーションセンター(院)	グローバル健康環境 (2014年度追加科目)	本庄かおり、住村欣範	2	1
		グローバルコラボレーションセンター(院)	Food Security, Globalization and Sustainability (2014年度追加科目)	思沁夫、上須道徳	2	1
		全学教育推進機構(院)	ソーシャル・イノベーション: 社会ニーズを世界で学ぶ (2014年度追加科目)		2	不開講

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2014 年度）

科目カテゴリー	開講部局(課程)	授 業 科 目 名	主担当教員	単位	学期
必修科目(2単位)	CSCD(院)	科学技術イノベーション政策概論 (2013年度新設科目)	神里達博ほか	2	1
選 択 科 目 : 6 単 位 以 上	CSCD(院)	科学技術イノベーション政策特別演習 (2013年度科目名称変更)	八木絵香ほか	2	1
	CSCD(院)	研究プロジェクト (2013年度新設科目)	小林傳司ほか	2	1・2
	CSCD(院)	科学技術とコミュニケーション (2013年度科目名称変更)	平川秀幸ほか	2	1
	CSCD(院)	科学技術社会論基礎 (2013年度新設科目)	小林傳司ほか	2	2
	CSCD(院)	科学技術イノベーション政策総合演習 (2013年度新設科目)	小林傳司ほか	2	1
	人間科学研究科(博士前期)	フィールド調査法特講	森田敦郎、木村自、宮原暁	2	2
	人間科学研究科(博士前期)	社会における科学技術特定演習 (2013年度新設科目)	山中浩司、森田敦郎	2	2
	法学研究科(博士前期)	総合演習(トランスプロフェッショナルリテラシー) (2014年度追加科目)	福井康太、西本実苗	2	2
	法学研究科(博士前期)	総合演習(生命倫理と法)	瀬戸山晃一	2	2
	法学研究科(博士後期)	特定研究(生命倫理と法)	瀬戸山晃一	2	1
	医学系研究科(博士前期)	ライフサイエンスの倫理と公共政策 (2013年度新設科目)	加藤和人、吉澤 剛	2	1
	工学研究科(博士前期)	サステナビリティ評価・技術論 (2014年度追加科目)	東海明宏ほか	2	1
	工学研究科(博士前期)	産業環境マネジメント論	東海明宏	2	1
	工学研究科(博士前期)	ライフサイクル工学 (2014年度追加科目)	福重真一	2	1
	工学研究科(博士前期)	都市デザイン論 (2014年度追加科目)	小浦久子	2	1
	基礎工学研究科(博士前期) (ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供)	ナノテクノロジー社会受容特論A	阿多誠文、伊藤正、小川久仁	2	1
	基礎工学研究科(博士前期)	科学技術移転論 (2014年度追加科目)	草部浩一	2	2
	国際公共政策研究科(博士前期)	環境法	松本充郎	2	1
	国際公共政策研究科(博士後期)	特殊研究(環境法)	松本充郎	2	1
	国際公共政策研究科(博士前期)	公共政策 I	星野俊也、多胡圭一	2	2
	国際公共政策研究科(博士前期)	特殊講義(開発と環境)	大槻恒裕	2	2
	国際公共政策研究科(博士後期)	特殊研究(開発と環境)	大槻恒裕	2	2
	国際公共政策研究科(博士前期)	プロジェクト演習(科学技術とソーシャル・エンタープライズ) (2014年度追加科目)	星野俊也ほか	2	2
	国際公共政策研究科(博士前期)	特殊講義(人事マイクロデータ分析1)	松繁寿和	2	通年
	国際公共政策研究科(博士後期)	特殊研究(人事マイクロデータ分析3)	松繁寿和	2	通年
	グローバルコラボレーションセンター(院)	グローバル健康環境 (2014年度追加科目)	本庄かおり、住村欣範	2	1
	グローバルコラボレーションセンター(院)	Food Security, Globalization and Sustainability (2014年度追加科目)	思沁夫、上須道徳	2	1
	全学教育推進機構(院)	ソーシャル・イノベーション:社会ニーズを世界で学ぶ (2014年度追加科目)		2	不開講

## 大阪大学 特色ある授業

### 「科学技術イノベーション政策概論」(1 学期、2 単位)

本科目では、毎回、各界で活躍するフロントランナーをゲストとして招き、科学技術イノベーションが、社会にとってより良いものとして展開していくための諸条件について、講義とディスカッションを通じて立体的に学んでいます。これらにより、科学技術イノベーション政策を考える基礎としての政策過程の実際や、国内外の政策や実践の動向、またイノベーション論の関連分野についての基礎的知識、さらには社会の側のメッセージを科学技術の現場にいかにして伝えるかなど、イノベーションをめぐる広範な論点について、理解を深めています。



2014 年度は、以下のような内容で行いました。なお、医療イノベーション論の回では、連携拠点である京都大学の川上浩司教授、仙石慎太郎准教授が講師を務めました。

第 1 回 ガイダンス

第 2 回 科学技術イノベーション政策の根拠と評価 鈴木潤 教授 (政策研究大学院大学)

第 3 回 レギュラトリーサイエンス論 岸本充生 教授 (東京大学公共政策大学院)

第 4 回 情報社会のユニバーサルデザイン 関根千佳 教授 (同志社大学政策学部)

第 5 回 医療技術の社会受容 川上浩司 教授 (京都大学大学院医学研究科)

幹細胞イノベーションと政策課題 仙石慎太郎 教授 (京都大学物質-細胞統合システム拠点)

第 6 回 産業連携論 宮田由紀夫 教授 (関西学院大学国際関係学部)

第 7 回 MOT とは 玄場公規 教授 (立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科)

第 8 回 全体まとめ

### 「科学技術と社会特論」(2 学期、2 単位)

本科目は、科学技術の進展や社会の状況と、受講生の関心・ニーズを踏まえ、毎年、具体的な科学技術の問題をテーマにした「ホットイシュー科目」です。現代社会における科学技術は、多大な恩恵をもたらすとともに、環境や人間の健康に対するリスクや倫理的問題などをめぐって、しばしば社会的な論争的になります。こうした科学技術をめぐる社会的対立の複雑なあり方を理解することは、科学技術イノベーション政策の立案や研究開発、社会の多様な立場をつなぐコミュニケーション実践を進めるうえで欠かせません。そのために本科目では、現在、社会的な論争が生じている科学技術の問題(ホットイシュー)



を二つ取り上げ、それぞれについて「賛成派」「反対派」といった対立する立場の二人の論客を講師として招き、講義を受けたうえで、受講生及び担当教員の間で討論を行っています。

2014 年度は、原子力発電と遺伝子組換え作物を題材にしました。なお、遺伝子組換え作物の回では、京都大学の久野秀二教授が講師の一人を務めました。

第 1 回 ガイダンス

第 2 回 原発のコスト問題 大島堅一 教授（立命館大学国際関係学部）

第 3 回 原子力問題の全体像 諸葛宗男 教授（東京大学公共政策大学院）

第 4 回 振り返り（原子力発電）

第 5 回 遺伝子組換え食品と私たちの生活 小泉望 教授（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科）

第 6 回 GMO をめぐる議論 久野秀二 教授（京都大学大学院経済学研究科）

第 7 回 振り返り（遺伝子組換え作物）

第 8 回 全体まとめ



## ❖ 京都大学の取組

### 京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」概要 「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。

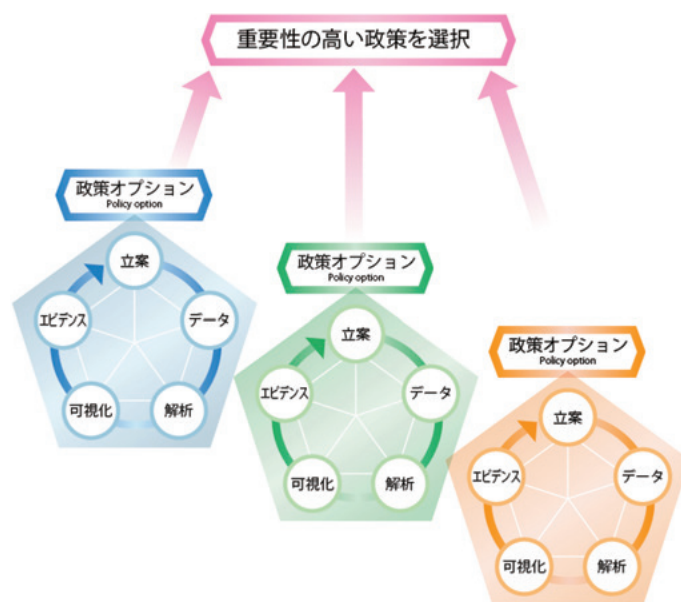


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

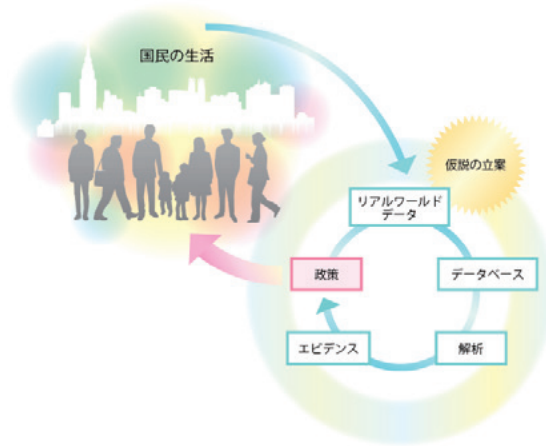


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

## 京都大学 「政策のための科学ユニット」運営状況

### 研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上）

#### 2013 年度

履修者数：7 名（研究科内訳—医学研究科：3 名、経営管理大学院：1 名、工学研究科：1 名、農学研究科：1 名、人間・環境学研究科：1 名）

#### 2014 年度

履修者数：7 名（研究科内訳—人間・環境学研究科：2 名、医学研究科：2 名、農学研究科：2 名、薬学研究科：1 名）

\*2014 年度の在籍者数の合計：14 名

修了者：7 名（進路—政府・公的研究機関：2 名、民間企業：2 名、博士課程在学中：3 名）

\*研究科横断型教育プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を取得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。そのため、修了者 7 名のうち 3 名は引き続き博士課程に在学中です。この点は大阪大学と京都大学で異なります。

### 進路状況（2014 年度修了者：7 名）

- ・国立病院機構本部総合研究センター診療情報分析部 1 名
- ・株式会社 Litalico 1 名
- ・三菱総合研究所 1 名
- ・ZEPTOR Asia 1 名
- ・京都大学大学院博士課程在学中 3 名

京都大学 研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2014 年度）

区分	科目名	期間		主担当教員(研究科)	単位	
		前期	後期			
入門必修科目	現代社会と科学技術		○	川上教授ら(医学研究科)	2	
連携必修科目	科学技術イノベーション政策特別演習	夏季集中		川上教授ら(医学研究科)	2	
必修科目	研究プロジェクト	通年		川上教授ら(医学研究科)	2	
選択科目Ⅰ：基軸科目群（1科目以上選択）	現代社会と科学技術入門	○		川上教授ら(医学研究科)	1	
	科学技術イノベーション政策総合演習	夏季集中		川上教授ら(医学研究科)	2	
	情報リテラシー基礎Ⅰ	○		小山田教授(国際高等教育院)	2	
	医薬品政策・行政		○	川上教授(医学研究科)	1	
	問題解決思考		○	末松教授(経営管理大学院)	2	
	疫学	○		中山教授(医学研究科)	2	
	公共政策論ⅠB		○	佐野教授(人間・環境学研究科)	2	
	クリティカル・シンキングの観点から見た科学技術と社会	○		伊勢田准教授(文学研究科)	2	
	選択科目Ⅱ：イシユール科目群（1科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田教授(国際高等教育院)	2
		医薬品の開発と評価		○	川上教授(医学研究科)	1
		情報リテラシー基礎1B		○	小山田教授(国際高等教育院)	2
		応用経済学		○	依田教授(経済学研究科)	2
		社会行動論演習2	○		ベッカー教授(こころの未来研究センター)	2
		健康情報学		○	中山教授(医学研究科)	2
		文献評価法	○		中山教授(医学研究科)	1
		比較農業食料組織経営論	通年		新山教授(農学研究科)	4
		食品安全学Ⅱ	○		新山教授(農学研究科)	2
		技術倫理と技術経営	○		榎木教授ら(工学研究科)	2
		医療経済学A	○		後藤准教授(白眉センター)	2
		共生社会環境論演習3B		○	佐野教授(人間・環境学研究科)	2

## 京都大学 特色ある授業

### 「現代社会と科学技術入門」(前期、1単位)・「現代社会と科学技術」(後期、2単位)

本2科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。これまで、「現代社会と科学技術入門」では、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしました。「現代社会と科学技術」では、意思決定と不確実性、データの可視化、ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス、政策としての生命倫理、大学の基礎研究と企業連携、宇宙政策、技術の質の評価、医療技術評価、食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス、幹細胞とイノベーション、科学技術と社会、移植医療などをテーマとしました。

2013年度はレポートを提出するのみでしたが、積極的な学生が多く自分のレポートに対するコメントを求めているので、2014年度からは、各テーマを担当した教員がレポートにコメントを添えて学生にフィードバックするようにしました。

2014年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

#### 「現代社会と科学技術入門」

- 第1回 5月15日 「政策のための科学」 オリエンテーション 川上浩司 教授(医学研究科)
- 第2回 5月22日 大学における学問とは? 分野融合・越境のダイナミクス 宮野公樹 准教授(学際融合教育研究推進センター)
- 第3回 5月29日 科学的方法について 小山田耕二 教授(国際高等教育院)
- 第4回 6月5日 震災現場から学ぶ防災と情報通信 井澤一朗 教授(宇宙航空研究開発機構)
- 第5回 6月12日 研究の進め方 全教員
- 第6回 6月19日 計量書誌学と科学・技術政策 仙石慎太郎 准教授(物質-細胞統合システム拠点)
- 第7回 6月26日 疫学とゲノム科学から社会基盤を考える 中山健夫 教授(医学研究科)
- 第8回 7月3日 現代の医療技術が起こす倫理問題とその政策 カール・ベッカー 教授(こころの未来センター)
- 第9回 7月10日 振り返りワークショップ 宮野公樹 准教授(学際融合教育研究推進センター)
- 第10回 7月24日 研究の進捗確認 全教員

#### 「現代社会と科学技術」

- 第1回 10月2日 トランス・サイエンスと Participatory Technology Assessment 小林傳司 教授(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
- 第2回 10月9日 データ可視化と政策立案 小山田耕二 教授(国際高等教育院)
- 第3回 10月16日 現代民主主義のもとでの政策決定 佐野亘 准教授(人間・環境学研究科)
- 第4回 10月23日 ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス 加藤和人 教授(大阪大学大学院医学研究科)

- 第5回 10月30日 生命科学を「規制」する？—政策としての生命倫理 位田隆一 教授（同志社大学グローバルスタディーズ研究科）
- 第6回 11月6日 大学の基礎研究と企業連携 小寺秀俊 教授（工学研究科）
- 第7回 11月13日 宇宙政策を考える 横田真 特任教授（学際融合教育研究推進センター）
- 第8回 11月20日 技術の質の評価 富田直秀 教授（工学研究科）
- 第9回 11月27日 トランザクション・コストと経済政策 末松千尋 教授（経営管理大学院）
- 第10回 12月4日 「政策のための科学」の計量書誌学データ分析 依田高典 教授（経済学研究科）
- 第11回 12月11日 医療費の増加と医療技術評価 後藤励 准教授（白眉センター）
- 第12回 12月18日 食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス 新山陽子 教授（農学研究科）
- 第13回 1月8日 幹細胞とイノベーション 仙石慎太郎 准教授（物質—細胞統合システム拠点）
- 第14回 1月15日 クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会 伊勢田哲治 准教授（文学研究科）
- 第15回 1月22日 移植医療の社会的価値 瓜生原葉子 准教授（同志社大学商学部）
- 第16回 1月29日 振り返りワークショップ 宮野公樹 准教授（学際融合教育研究推進センター）

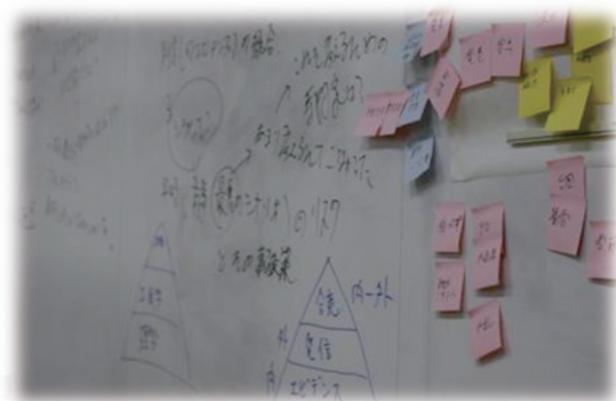
## ❖ 合同講義

### 「科学技術イノベーション政策特別演習」(集中、2単位)

本科目は、大阪大学と京都大学合同で、公共的関与及び ELSI に関する重要なテーマについて、ゲスト講師も含めた数教員と異なる専門分野の学生との相互討論を行い、ディスカッションを通じて、課題となる科学技術と社会のかかわりについて理解し、具体的な議論手法を身につけることを目的としています。テーマやゲスト講師の選定は、その都度の科学技術の進展や社会の状況、学生の興味・関心を踏まえて行われています。

2013年度は、8月29日、8月30日、9月5日、9月6日の4日間で、大阪大学において合同講義を実施しました。高レベル放射性廃棄物をテーマにした講義で、高レベル放射性廃棄物の取り扱い方について議論や提案をした後、この問題に対して自分が一専門家としてどのような貢献が可能かについて発表を行いました。

2014年度は、9月4日と9月5日(京都大学)、9月11日と9月12日(大阪大学)の4日間で、両大学の学生を対象として実施しました。講義では、先端科学技術と社会の関係について考え、とくに研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感させることを目的としました。異なる研究科の学生による、自らの専門分野の紹介プレゼンテーション及び具体的な科学技術的テーマをめぐる相互討論を行い、ディスカッションを通じて、課題となる科学技術と社会のかかわりについて理解し、具体的な議論手法を身につけることを目指しました。



### 「科学技術イノベーション政策総合演習（サマーキャンプ）」（集中、2単位）

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つ、サマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。

2013年度は、8月23日から25日にかけて、サマーキャンプがオークラフロンティアホテルつくばで開催されました。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、8月21日に学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしました。大阪大学からは学生7名と教員3名、京都大学からは学生6名と教員5名が参加しました。

2014年度は、2013年度同様、学生は8月27日の事前ワークショップに参加した上で、8月31日から9月2日にかけて淡路島夢舞台国際会議場で開催されたサマーキャンプに参加しました。大阪大学からは学生7名と教員9名、京都大学からは学生9名と教員6名が参加しました。詳細は、「3. 拠点間共同プログラムへの参画」の「サマーキャンプの設計・運営」を参照ください。





## 「研究プロジェクト」(通年、2単位)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの(日英可)を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行い、その一方で、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行いました。最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2013年度は大阪大学の2名について、2014年2月19日に大阪大学豊中キャンパスにおいて発表会を行いました。2014年度は大阪大学7名と京都大学7名について、2015年2月14日に大阪大学中之島センターにおいて合同発表会を行いました。

このような授業、個別指導、そして合同発表会によって、本プログラムの最終成果物として、また将来、本プログラムのホームページや大学紀要における公開を想定した質の高い論文作成ができたと考えています。学生論文・口頭発表の題名は以下のとおりになります。

### 研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

#### 2013年度 大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム—「翻訳」、「批判」から「構築」へ—

#### 2014年度 大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編—エネルギーを中心として—
- (2) 科学技術とフィクション—人工子宮の現実化に寄せて—
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査—先行研究を参考に学生側の視点を探る—
- (4) 環境ラベルに関する一考察—NLマークを事例にあげて—
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」—福島市の事例をもとに—
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件—習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化—
- (7) 科学のイメージと PR—企業広告において「科学的である」とはどういうことか—

#### 2014年度 京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価—社会の理解のために—
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言—医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて—
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床—応用への実現に関する調査研究—
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定—選択型実験による接近—

- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション 実施状況の経年的変化  
ーレセプトデータベースを用いた疫学的研究ー



### 阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。大阪大学の入門必修科目「科学技術イノベーション政策概論」において、京都大学の川上浩司教授、仙石慎太郎准教授が講師を務め、京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の小林傳司教授、加藤和人教授が講師を務めました。

## ❖ 阪大学生の声

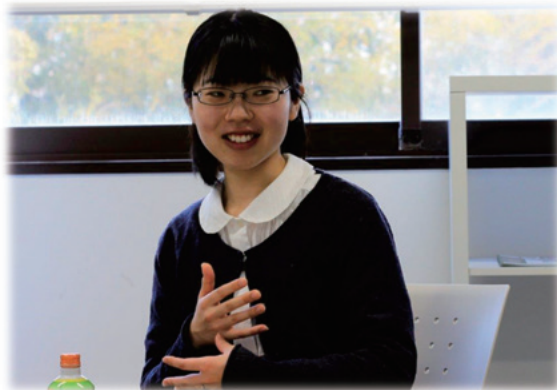
### 傍観者のままじゃ、何も言うことができない。

鈴木 麻由さん（理学研究科 宇宙地球科学専攻 M2）

私が STiPS を選んだのは、東日本大震災がきっかけです。当時私は、文部科学省の放射線測定プロジェクトに関わっていました。しかし、測定データが公表されると、批判を受けている。それを見て「なぜこんなことが起きているのだろう」というモヤモヤを感じていました。

結局、私はそれをテーマに研究プロジェクトに取り組みました。研究プロジェクトをスタートした時、私は「自分がどう思うか」よりも、「事実かどうか」を知りたい、傍観者でいたいと思っていたのですが、次第に、自分の中にも様々な主張があり、いずれも自分の見方でものを言っているのだな、と考えるようになりました。傍観者では何も言うことができないという研究スタイルがあると分かったのです。

また、私が「ここが問題だ」と考えても、「このデータからはそれが言えない」ということが指摘されたり、逆にそのデータを基にして「こういう主張はできうる」ということがわかってきたり、ということがありました。そもそも理系の研究では、データから「言えること」しか存在しない。その違いが見えてきたのが、私にとって大きな発見でもありました。



### 政策と新しい技術をつなぐ、ということを考えたい。

千代原 真哉さん（生命機能研究科 生命機能専攻 M1）

私は、医療現場で働いていた経験を活かし、将来は障がいが残っている患者の方がその人らしい QOL (Quality of Life) を高められるような、何か新しいものを提供したいという想いがあります。ただ、技術を開発するだけでは足りない、とは考えています。STiPS でいろいろな立場の方の話を聞く機会を得て、だんだんと「政策と社会」「政策と新しい技術」の間をつなぐ、ということが重要なのではないか、と考えるようになってきました。

医療現場では、政策に直接影響を受ける場面が多いです。診療報酬や介護報酬が変わると、病院や施設により提供できるサービスや方針が変わります。このような変化に伴い国の方針が見えるのですが、どうしてそのような方針をとったのか分からないこともありますし、家族への負担や現場の状況はどの程度加味されているのか疑問に思うこともありました。STiPS は、それらの問題意識を深めることができる良い機会だと捉えています。研究との両立は大変かなとも思いましたが、STiPS の先生方に「気軽にやってみたら」と背中を押していただきました。これからも自分のペースで取り組んでいきたいと考えています。



**科学はあいまい。だからこそ、自分の科学をしっかりさせたい。**

**張 子見さん（理学研究科 化学専攻 D1）**

STiPS によって、僕の科学に対する考え方が変わりました。科学がそんなにかっちりとしたものではない、むしろあいまいなものだと考えるようになりました。それは、STiPS 全体の雰囲気から感じ取ったというのが自分自身の中で一番ぴったりくる表現だと思います。そして、科学はあいまいだということが分かった上で、もうちょっと自分の科学をしっかりさせようとは思いました。科学にあいまいな部分もあるのですが、昔ながらのきちんとした科学があって、そこはちゃんと自分の仕事としてやるべきだと思いました。



研究プロジェクトは、いわゆる理系の「研究概要報告書」や「論文」の文とは全く違う、ある意味ジャーナリズム的な文章を書く機会と捉えていました。研究や発表で後世に残っているものももちろんあるのですが、やはり「文章」として残っているものが多いと、僕は感じています。研究プロジェクトで是非、技術のひとつとしてそれを書いてみたいと思いました。何に対して書くかとか、どういうタイプの文章を書くかで、どう残っていくかが全く違うので、ここで身につけた文章を書く技術が、将来どこかで必要になったらいいな、と考えています。

## ❖ 京大学生の声

### 複雑化する社会課題を解決するひとになるために

鈴木 望さん（医学研究科 社会健康医学系専攻 M1）

「人口爆発や資源枯渇、環境問題をはじめ、超高齢化社会や疾病構造の変化などの社会課題は一つの科学分野では対応しきれず、様々な分野の人間が集まり有機的に問題解決に向けて活動するチームが必要である」このようなコンセプトを、本プログラムの説明会の時に伺い、とても感銘を受け応募を決意しました。

私は、これまで管理栄養士として、臨床と公衆衛生の分野で医学系の研究活動を中心に活動しておりましたが、これからの健康社会のビジョンを考えるにあたり、さまざまなバックグラウンドの人たちと健康のトピックを中心とした社会課題に取り組む必要性を感じておりました。そんなときに出会ったのが本プログラムです。

複雑化した社会課題を解決するチームの一員になる、ないしそのような関係性を生む環境をつくる人になるためには、様々な立場、文脈を理解する素養が必要です。その素養を培うため、政策という多くのステークホルダーが関わる活動の基礎を学ぶ「政策のための科学」は、大変有効でありかつ、自身の成長に大きく寄与していると感じています。



### 政策のための科学ユニットの魅力とは

小野 美美子さん（医学研究科 社会健康医学系専攻 M1）

私が、「政策のための科学ユニット」に対して感じている魅力とは、主に以下の二点です。

まず一つ目は、自分自身を客観的に捉える機会が得られるという点です。本ユニットのメンバーは、所属分野も、年齢も、社会的な立場も様々です。そういったメンバーが、政策のための科学という共通のキーワードのもとに集まり、現代社会が抱える様々な課題に関して議論を交わすことは、様々な視点からの意見に触れる機会となるため、貴重な体験であると感じます。そしてそれは同時に、集団においては往々にして最終的な目標が異なることがあること、もしくは、同じ方向を目指している

場合であっても、手段や方法を議論する段階においては意見が異なることを実感することであり、またそういった現実をどう対処していくか、考えるきっかけとなるように思います。

そして二つ目は、自身の視野が広がり、より俯瞰的に物事を捉えられるようになるという点です。これは、講義や研究を通じ、様々な分野を幅広く学ぶことにより、自身に親和性の高くない課題に関しても熟



考する機会を得ることによります。また、ある課題の核となる事柄のみを深掘するだけではなく、その他の事柄との関連性や影響、効果の大きさなど評価し、そして考慮することは、現代社会の抱える課題解決において不可欠であると思います。

このように、「政策のための科学ユニット」では、課題解決能力（科学的根拠の評価、及び対象集団との対話）の素養を身に付けるのに適した環境であると感じます。

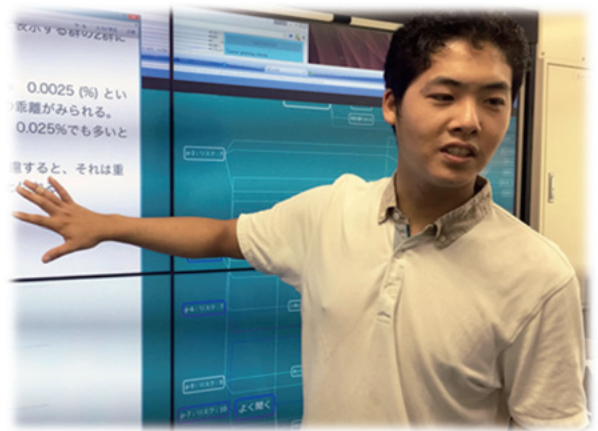
そして、私の今後の目標としては、本ユニットで学んでいることを活かし、最先端の医科学や医学を社会へと繋げ、またその結果を評価して研究の分野へフィードバックさせる循環の一端を担う立場として活躍していきたいと思っています。

### 科学的根拠に基づいた、科学技術政策を学ぶために

#### 三好 農仁さん（農学研究科 生物資源経済学専攻 M1）

私の学ぶ食品の安全を守る仕組みについて、その措置は国際的に調和されていなければなりません。調和させるためには、科学的データに基づくことが必要です。高度科学技術に起因する社会問題は、やはり科学的データに基づいて議論するべきで、それがもっとも公平な解決策に近いと考えています。

京大における本講座は、科学技術の評価方法に重きをおかれているようにも思えますが、一方でその評価方法が妥当かどうかについても議論を進めたいと感じています。私自身の研究では、自らの方法論が妥当であるか、また不適切な部分はどこかをしっかりと明らかにしてゆくことも課題としていきたいです。



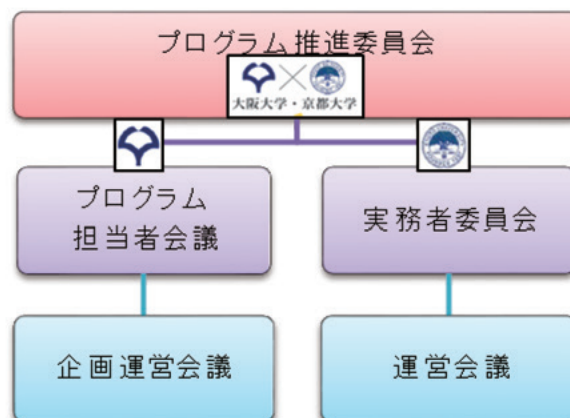
## 2. プログラム推進委員会の運営

---

## 2. プログラム推進委員会の運営

### ❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



- 阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012年より、毎年4回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2014年は6月11日、9月4日、11月19日、2月14日の計4回実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間合同事業に関する調整を行っています。

- 各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

- 各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主にコミュニケーションデザイン・センターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。



## ❖ アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。アドバイザーは下記の4名です。

- ・鈴木 寛 文部科学大臣補佐官、東京大学公共政策大学院教授、慶應義塾大学政策メディア研究科兼総合政策学部教授
- ・古川 俊治 自民党参議院議員、医学博士、弁護士、慶應義塾大学教授
- ・鷺田 清一 大谷大学文学部教授、前大阪大学総長
- ・三木 孝 神戸市保健福祉局長

2014年度は2015年2月14日に、大阪大学中之島センターにおいてアドバイザー会議（第1回）を開催し、鈴木寛氏、鷺田清一氏、三木孝氏のアドバイザー3名にご出席いただきました。当日は、会議前に実施した「研究プロジェクト」阪大・京大合同発表会にもご参加いただき、学生発表に対して貴重なコメントをいただきました。また、アドバイザー会議では、当拠点の活動報告を説明した後、教育研究活動や今後の人材育成のあり方について、忌憚のないご意見をいただくとともに、アドバイザーとしての貴重な評価をいただきました。



## ❖ カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGOなどの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は21、うち新設科目数は7でしたが、2014年度の開講科目数は30、うち新たに追加した科目数は9となりました。京都大学では、本プログラム開

始の 2013 年度の開講科目数は 22、うち新設科目数は 5 でしたが、2014 年度の開講科目数は 1 科目を新たに追加し 23 科目となりました。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件 14 単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014 年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013 年 3 月 27 日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書及び覚書」に基づいています。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

## ❖ 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「5. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	場所	主催等
科学技術政策セミナー			
【第6回科学技術政策セミナー】 今後の科学技術イノベーション政策の方向性と「夢ビジョン2020」（斉藤卓也／文部科学省大臣官房政策課評価室長）	2014年 5月12日	大阪大学 テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
【第7回科学技術政策セミナー】 ・職員、文部科学省へ出向する（花岡宏亮／大型教育研究プロジェクト支援事務室） ・科学技術庁（現文部科学省）を経験して、研究の道に進む（神里達博／大阪大学コミュニケーションデザイン・センター） ・研究者、経済産業省へ出向する（北岡康夫／工学研究科付属高度人材育成センター）	2014年 7月25日	大阪大学 テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
【第8回科学技術政策セミナー】 ・我が国の科学技術をとりにまく現状と研究開発戦略（中山智弘／(独)科学技術振興機構研究開発戦略センター企画運営室） ・助成機関における戦略立案：NEDOの事例（白川展之／(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構技術戦略研究センター）	2014年 11月14日	大阪大学 テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
「シリーズ：適正技術」			
「シリーズ：適正技術」第5回ワークショップ 「Design for Life—地域が変わるものづくり」 「地域再生の秘伝レシピ、教えます」	2014年 7月2日	大阪大学 ステューデント・コモンズ	主催：CSCD 共催：STiPS、OSIPP 稲盛財団寄附講座
「シリーズ：適正技術」第6回ワークショップ 「Design for Life—地域が変わるものづくり」 「東南・南アジアにおける適正技術の実現に向けて」	2014年 11月8日	大阪大学 オレンジショップ	主催：STiPS
「シリーズ：適正技術」第7回ワークショップ 「Design for Life—地域が変わるものづくり」 「課題発見とソーシャルデザイン」	2014年 11月20日	大阪大学 ステューデント・コモンズ	主催：STiPS, OSIPP 稲盛財団寄附講座

「シリーズ：適正技術」第8回ワークショップ 「Design for Life－地域が変わるものづくり」 「大阪大学発！ソーシャルエンタープライズ」	2015年 1月22日	大阪イノベーションハブ	主催：OSIPP 稲盛財団寄附講座 共催：STiPS、大阪イノベーションハブ
「シリーズ：適正技術」第9回 Fieldwork & Design Session 「Design for Life－地域が変わるものづくり」	2015年 2月22日 －23日	滋賀県高島市朽木麻生地区	主催：STiPS, OSIPP 稲盛財団寄附講座
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)			
【第9回 STiPS Handai 研究会】 科学報道と社会 (元村有希子／毎日新聞デジタル報道センター)	2014年 5月29日	大阪大学 ステューデント・コモンズ	主催：STiPS
【第10回 STiPS Handai 研究会】 原子力と社会 (鈴木達治郎／長崎大学核兵器廃絶研究センター、前内閣府原子力委員会)	2014年 6月27日	大阪大学 21世紀 懐徳堂 スタジオ	主催：STiPS
【第11回 STiPS Handai 研究会】 今後の科学技術イノベーション政策の方向性と「夢ビジョン2020」(斉藤卓也／文部科学省大臣官房政策課評価室)	2014年 7月10日	大阪大学 ステューデント・コモンズ	主催：STiPS
【第12回 STiPS Handai 研究会】 宇宙政策とコミュニケーション (山崎直子／宇宙飛行士、内閣府宇宙政策委員会委員)	2014年 11月28日	大阪大学 21世紀 懐徳堂 スタジオ	主催：STiPS 大阪大学法学会
ラボカフェ			
「シリーズ：科学技術イノベーション」第10回 生命科学の研究倫理 (彌川準二／科学ジャーナリスト)	2014年 7月15日	アートエリア B1	主催：STiPS
「シリーズ：科学技術イノベーション」第11回 災害情報のコミュニケーション (矢守克也／京都大学防災研究所・巨大災害研究センター)	2014年 9月9日	アートエリア B1	主催：STiPS
「シリーズ：科学技術イノベーション」第12回 科学コミュニケーションとイノベーション (牧慎一郎／大阪市立天王寺動物園)	2014年 11月20日	アートエリア B1	主催：STiPS
「シリーズ：科学技術イノベーション」第13回 高齢化社会とソーシャルイノベーション (藤城眞／財務省大臣官房審議官)	2015年 3月30日	アートエリア B1	主催：STiPS

### 3. 拠点間共同プログラムへの参画

---

### 3. 拠点間共同プログラムへの参画

#### ❖ サマーキャンプの設計・運営

大阪大学・京都大学は、拠点間共同プログラム「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』基盤的研究・人材育成拠点 2014 年度サマーキャンプ」の主催校となり、サマーキャンプの運営を行いました。

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。そのネットワークの構築及び展開に関し、本拠点はこれまでの経験と知見を活かし、自発的かつ主導的な方法でサマーキャンプの設計並びに運営改善を担いました。

2013 年度のサマーキャンプでは、主催拠点の政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策プログラム (GIST) と連携しつつ、本拠点は、サマーキャンプのメインイベントでもある学生グループワークの設計を担当しました。具体的には、阪大・京大の講義などで培った経験を活かし、学生グループワークにおけるアイデア出しの方法や教員メンターの役割を設計しました。また、サマーキャンプ後には、こうした大学間連携教育の実践の成果を学術論文としてまとめて発信しました。詳細は、山内保典・神里達博 (2014) 「大学間連携教育の実践：政策のための科学『サマーキャンプ 2013』の教訓』 *Communication-Design* 10, pp. 37-56 を参照ください。

2014 年度のサマーキャンプでは、阪大・京大の本拠点が主催校となり、サマーキャンプの運営を行いました。兵庫県立淡路夢舞台国際会議場において開催したサマーキャンプには、過去最高の計 88 名が参加しました。主催校として、ロジスティックのほか、拠点間のネットワークの構築及び展開に関して、次の役割を担いました。

- ・「人口減少社会—2045」のテーマ設定と同分野に精通するゲスト講師の選定及び招聘
- ・キャンプ前における事前学習の準備及び学生・メンター教員への指導・助言
- ・当日における教員メンターの役割と学生グループワークの設計
- ・当日の進行と学生グループ発表に関する教員評価のとりまとめ

また、キャンプ事後には学生へのアンケートを実施し、その結果を SciREX 基盤的研究・人材育成拠点運営協議会 (第 7 回) にて発表するなど、次年度以降のサマーキャンプのさらなる改善に向けて積極的な役割を果たしました。

## サマーキャンプの目標

全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取組をお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築すること。

## 2014 年度の体制

主催：大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

共催：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム (GIST)

東京大学 科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」教育・研究ユニット (STIG)

一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム (IMPP)

九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター (CSTIPS)



サマーキャンプのプログラム

	8月31日(日)	9月1日(月)	9月2日(火)	
午前		8:30-10:00 <b>特別講演</b> 藻谷浩介氏 <small>(日本総合研究所調査部主席研究員)</small>	8:30-10:00 <b>グループワーク</b> <b>発表準備</b>	
		10:00-10:15 休憩	10:00-13:00	
		10:15-11:45 <b>グループワーク</b> <b>ガイダンス・ビジョン形成</b> - テーマに関する事前資料や当日配付資料、講演等を踏まえて、プロジェクトを設定	<b>グループワーク</b> <b>発表会</b> - 各グループ(15分発表+10分質疑)	
		11:45-13:00 <b>昼食</b>		
午後	13:00 ※集合まで昼食各自 <b>JR 新神戸駅 集合</b> - バス移動	<b>【学生】</b> 13:00-14:30 <b>グループワークア イデア出し</b>	<b>【教職員】</b> 13:30-15:30 <b>拠点関係者会合①</b>	13:00-14:00 <b>昼食</b>
	14:00-14:30 <b>受付</b> - 淡路夢舞台国際会議場(現地集合可)			14:00-15:00 <b>閉会式</b> - 講評と表彰 - 閉会挨拶
	14:30-14:45 <b>開会式</b> ※	14:30-15:30 <b>自由交流</b>		15:00-16:00 <b>出発</b> - バス移動(現地解散可)
	14:45-16:15 <b>基調講演</b> 三木孝氏 <small>(神戸市保健局長)</small>	15:30-17:00 <b>グループワーク</b> <b>政策案の ラフ スケッチ</b>	15:30-17:00 <b>拠点関係者会合②</b> - 学生からの質問等への対応あり	16:00 <b>JR 新神戸駅 解散</b>
	16:15-16:30 休憩			
	16:30-18:00 <b>学生研究発表</b> -1人(10分発表+5分質疑) -発表人数が増えた場合、時間延長等	17:00-19:00 <b>グループワーク</b> <b>中間発表会</b> - 各グループ(10分発表+5分質疑)		
	18:00-20:00 <b>懇親会</b>	19:00-20:00 <b>夕食</b>		
	20:00- <b>自由時間</b>	20:00-22:00 <b>グループワーク(任意)</b> <b>個別ブラッシュアップ</b>		

※ 開会式：開会挨拶(小林傳司 STiPS 拠点長)、来賓挨拶(黒田昌裕 SciREX 委員会主査)



## ❖ 共催：国際シンポジウム 2014

科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点 国際シンポジウム 2014 年度「よりよいガバナンスによる科学技術イノベーションの有効活用」(主催：東京大学) (2014年11月28日) を共催し、本拠点から平川秀幸 (大阪大学・教授) がパネリストとして登壇しました。

### STIG 2014 年度国際シンポジウム「よりよいガバナンスによる科学技術イノベーションの有効活用」 —Making the Most of Science and Innovation through Better Governance—

日時：2014年11月28日(金) 13:00～17:45

会場：東京大学本郷キャンパス 福武ラーニングシアター

主催：東京大学科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」教育・研究ユニット (STIG)

概要：科学技術イノベーションに対する投資効果を最大化するためには、それらの成果が社会に還元される場面におけるマネジメントが重要な意味を持っています。本シンポジウムでは、国内外で第一線の研究と実践に関わる方々に、最先端の研究と実践を共有いただき、科学技術イノベーションの社会実装を促進するガバナンスについて新たなアイデアを模索します。(イベント告知文より)

#### ◆プログラム◆

13:00-13:05 開会挨拶：城山英明 (研究代表者・東京大学公共政策大学院)

13:05-13:35 【基調講演 1】

Dr. Kenneth Oye (マサチューセッツ工科大学)

「バイオテクノロジーにおける先行的順応型リスクマネジメント：医薬品と合成生物学への適用」

(Proactive and Adaptive Risk Management in Biotechnology: Applications to Pharmaceuticals and Synthetic Biology)

13:35-14:05 【応答発表&質疑応答】

佐藤 智晶 (東京大学公共政策大学院)

柴山 創太郎 (東京大学工学系研究科)

14:05-14:35 【基調講演 2】

Dr. Michael Rogers (前 EC 委員長科学技術顧問)

「欧州におけるリスクガバナンスの最新動向：予防原則からスマートレギュレーションへ」

(Recent trends in Risk Governance in Europe: From Precaution to Smarter Regulations)

14:35-15:00 【応答発表&質疑応答】

平川 秀幸 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

15:00-15:15 休憩

15:15-15:45 【基調講演 3】

Dr. David Laws (アムステルダム大学)

「ホットな順応的管理：事実とステークホルダーの間で」

(Hot Adaptation: Working between facts and stakeholders)

15:45-16:15 【応答発表&質疑応答】

松浦 正浩（東京大学公共政策大学院）

鎗目 雅（東京大学公共政策大学院）

16:15-16:45 【基調講演 4】

Dr. Jason J Blackstock (ユニヴァーシティカレッジロンドン)

「公的意思決定過程において科学・技術・工学の知見を理解し強化する方法」

(Understanding and Strengthening Science, Technology, and Engineering Knowledge within  
Public Decision-Making Processes) (tentative)

16:45-17:15 【応答発表&質疑応答】

城山 英明（東京大学公共政策大学院）

17:15-17:45 総合討論

総合司会：松浦 正浩（東京大学公共政策大学院）

詳細や実施報告書は、下記からご覧ください。

<http://stig.pp.u-tokyo.ac.jp/?p=810#>

## 4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

---

## 4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、本拠点の参画教員が中心となり、ELSI や公共的関与に関する研究成果を学術論文や学会報告などを通じて多数発表してきました。2014 年度の参画教員別の研究業績の詳細については、「7. 政策のための科学に関連する活動」を参照ください。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。また、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを昨年度に引き続き実施しました。科学技術政策セミナー、「シリーズ：適正技術」、「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）につきましては本章を、ラボカフェ、政策のための科学イベントにつきましては「5. 関西ネットワークの発展」を、参照ください。

## 🍷 共催：科学技術政策セミナー

現代社会において、科学技術は日常生活の中で非常に大きな役割を担っています。その科学技術のあり方は政府の科学技術政策の中で位置付けられ、研究者集団の振興を支えてきました。現在、日本においては、2011年に閣議決定された第4期科学技術基本計画に基づき、「新たな価値の創造に向けて、我が国や世界が直面する課題を特定した上で、課題達成のために科学技術を戦略的に活用し、その成果の社会への還元を一層促進する」という科学技術イノベーション政策の振興が図られ、具体的に政策を遂行するための手段は政府により諸施策が進められています。

STiPS 共催の本セミナーは、このような科学技術政策に焦点を当て、参加された皆さまが広く俯瞰的な視野でご自身の専門分野を発展させ、かつ大阪大学の研究力を向上させるための情報交換の場としてシリーズを開催しています。

### 【共催イベント】第6回科学技術政策セミナー

- 講演タイトル：今後の科学技術イノベーション政策の方向性と「夢ビジョン 2020」
- 日時：2014年（平成26年）5月12日（月）16:00～18:00
- 場所：吹田キャンパステクノアライアンス棟 1F 交流サロン
- 講演者：斉藤 卓也 氏（文部科学省大臣官房政策課評価 室長）
- 主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室

科学技術政策の土台となる科学技術基本計画の策定や各省庁における政策立案及び策定プロセスについて、現場で政策立案に携わってきた方をお招きし、講演をしております。

個別具体的な研究分野を扱いませんが、研究戦略を練る上での参考となる話題となります。また参加されたみなさまが広く俯瞰的な視野でご自身の専門分野を発展させ、かつ「国立大学改革プラン」にも謳われている「国際水準の教育研究の展開」、「ガバナンス機能の強化」、「自主的・自立的な改善・発展を促す仕組みの構築」の方法を考えるための情報交換の場として企画しております。ご関心のある方々が幅広く参加して下さることを望んでいます。（イベント告知文より）

### 【共催イベント】第7回科学技術政策セミナー

- 話題提供1：職員、文部科学省へ出向する  
花岡 宏亮（大型教育研究プロジェクト支援事務室 専門職員）
- 話題提供2：科学技術庁（現文部科学省）を経験して、研究の道に進む  
神里 達博（コミュニケーションデザイン・センター 特任准教授）
- 話題提供3：研究者、経済産業省へ出向する  
北岡 康夫（工学研究科附属高度人材育成センター 教授）
- 日時：2014年（平成26年）7月25日（金）15:00～17:00
- 場所：吹田キャンパステクノアライアンス棟 1F 交流サロン
- 主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室

今回は、大学から文部科学省や経済産業省に出向していた方や官僚を経験して研究者に転じた方などの経験談をうかがいながら「大学からみた科学技術政策」について参加されたみなさんと一緒に考えたいと思います。（イベント告知文より）

### 【共催イベント】第8回科学技術政策セミナー

- 講演1「我が国の科学技術を取りまく現状と研究開発戦略」  
中山 智弘 氏（(独)科学技術振興機構 研究開発戦略センター 企画運営室長）
- 講演2「助成機関における戦略立案：NEDOの事例」（仮題）  
白川 展之 氏（(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構技術戦略研究センター 研究員）
- コメンテーター  
細野 光章 氏（東京工業大学研究戦略推進センター 特任准教授）
- 日時：2014年（平成26年）11月14日（金）17:30～19:30
- 場所：吹田キャンパステクノアライアンス棟 1F 交流サロン
- 主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室

今回は、国の研究助成機関において戦略を考える部署の方をお招きし、戦略目標を検討するプロセスなどをうかがいながら大学の実務とどう関係するのかについて参加されたみなさんと対話型で議論を進めたいと思います。（イベント告知文より）

## ❖ 共催：「シリーズ：適正技術」

STiPS 共催の「シリーズ：適正技術」では、ものづくり、国内外での社会貢献、ビジネスの領域をつなぐ「適正技術」について、ワークショップや実践を通じて考えていきます。

2013年度より、「シリーズ：適正技術」ワークショップ「Design for Life—地域が変わるものづくり」を開催しています。複雑化・多層化する現地の地域課題解決のための適正技術創出のためには、ものづくりの専門性のみならず、サステナビリティ、開発援助、ビジネスなど、様々な分野との「知の融合」が必要となります。学際的かつ実践的な課題解決型の取組みは、その社会貢献の可能性に加え、大学教育においては、学生の課題発見・解決能力向上やものづくりに伴うデザイン力の向上などの様々な教育効果が期待されることから、2000年代以降において、欧米主要大学において、適正技術を題材した教育プログラムが普及しました。一方で、国内では、体系的な適正技術に関する教育システムは確立されていません。しかし、社会課題の解決に向けた適正技術創出の必要性は、開発途上国のみではなく、超高齢化社会や地方過疎化といった「課題先進国」である日本が抱える課題解決のためにも不可欠であると考えられます。

こうした問題意識のもと、「シリーズ：適正技術」は、国内外での社会貢献、ものづくり、ビジネスなどの領域をつなぐ「適正技術」のあり方について、ワークショップや実践を通じて考えていくことを目的としています。これまでのイベント9回のうち、7回についてはデザイナーや国際的に活躍する海外NPOの人などをゲスト講師として迎え、一般の方も参加可能なワークショップを実施し、国内外の社会課題の発見と解決方法のあり方について活発な議論を行ってきました（各回、20～60人が参加）。また、残りの2回では、滋賀県高島市朽木麻生において、1泊2日のフィールドワーク&デザイン・セッションを行い、地域課題発見とものづくりによる解決案づくりや仕組みづくりのあり方について知見を深めました。

### 「シリーズ：適正技術」第5回ワークショップ開催

- 日時：7月2日（水）18:00～19:30
- 場所：大阪大学ステューデント・コモンズ 1F 開放型セミナー室（豊中キャンパス）
- タイトル：「地域再生の秘伝レシピ、教えます」
- ゲスト講師：北田 真規（NPO 法人結びめ 研究員／物語力出版 代表）
- 参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般（とくに「地域が変わるものづくり」の実践に関心がある方）
- 定員：50人
- 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
- 共催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

「シリーズ：適正技術」  
#5回  
ワークショップ

**Design for Life**  
地域が変わるものづくり

「シリーズ：適正技術 Design for Life」では、国内外での社会貢献、ものづくり、ビジネスの領域をつなぐ「適正技術」について、ワークショップや実践を通じて考えていきます。

日時 7月2日（水）18:00～19:30  
会場 大阪大学ステューデント・コモンズ 1階 開放型セミナー室（豊中キャンパス）  
※http://www.designforlife.jp/workshop/5/

「地域再生の秘伝レシピ、教えます。」

ゲスト講師：NPO 法人結びめ 研究員／物語力出版 代表 北田真規  
大阪府生まれ。2008年、東洋経済新報社に入社。2009年より2010年秋に東京で「地域再生」をテーマにしたプロジェクトを立ち上げ、全国各地を巡り、地域再生の現場を取材。取材した地域再生の現場をまとめた書籍『地域再生の秘伝レシピ』を出版。現在は、NPO 法人「結びめ」の代表理事として、NPO 活動、市民活動などに取り組んでいる。

主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）  
共催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

お問い合わせ：STiPS 事務局  
TEL: 06-6643-7111  
E-MAIL: sti@ipc.osaka-u.ac.jp

「シリーズ：適正技術」第6回ワークショップ開催

- 日時：11月8日（土）11:00～17:00
- 場所：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター  
オレンジショップ 基礎工学部 I棟 1F（豊中キャンパス）
- タイトル：「東南・南アジアにおける適正技術の実践に向けて」
- ゲスト講師：眞子 岳（東洋大学 国際地域学部 助教）、松行 輝昌（大阪大学 全学教育推進機構 准教授）
- 参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般
- 定員：50人
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）



「シリーズ：適正技術」第7回ワークショップ開催

- 日時：11月20日（木）16:20～17:50
- 場所：大阪大学ステューデント・コモンズ 2階マッチングセミナー室  
（豊中キャンパス）
- タイトル：「課題発見とソーシャルデザイン」
- ゲスト講師：西村 勇也（NPO 法人ミラック 代表理事）
- 参加対象：大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、大阪大学教職員、その他の大学学生、一般（とくに「地域が変わるものづくり」の実践に関心がある方）
- 定員：50人
- 主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP） 稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）





「シリーズ：適正技術」第8回ワークショップ開催

- 日時：2015年1月22日（木）17:30～20:30
- 場所：Osaka Innovation Hub（大阪イノベーションハブ）
- タイトル：「大阪大学発！ソーシャルエンタープライズ」
- ゲスト講師：中村 俊裕（NPO Kopernik 共同創設者兼 CEO）、  
領家 誠（大阪府商工労働部ものづくり支援課 参事）、  
西村 勇也（NPO 法人ミラツク 代表理事）
- 参加対象：一般、大阪大学学生（学部学生・大学院学生）、  
大阪大学教職員、その他の大学学生など
- 定員：70人
- 主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）  
稲盛財団寄附講座
- 共催：大阪イノベーションハブ、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）



「シリーズ：適正技術」Fieldwork & Design Session

- 日時：2015年2月22日（日）～23日（月）
- 場所：滋賀県高島市朽木麻生地区
- 定員：15人（先着順）
- 主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）
- 詳細：<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/2015/000869.php>

—事前説明会—

日時：2015年2月12日（木）16:30～17:30  
場所：ステューデントコモンズ2階 セミナー室2



## ❖ 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

学際的教育が有効に機能するために、授業を担当する教員が、他の教員の教えている内容を知ることは有益です。しかし実際には、学生は様々な参画教員の授業を受け、異なる領域の知見に触れることができますが、参画教員同士がそうした経験をする場は限られています。この STiPS Handai 研究会は、学内外の研究者を招き、学生だけでなく教員が相互に学び合うことを目的とした、少人数の議論を中心とした研究会です。これをきっかけに学内を中心に協力教員の輪を拡充するとともに、相互理解を深めていくことが期待されます。実際にこの研究会で講演頂いた方に、来年度授業提供を頂くケースも生まれました。下記は STiPS の Web サイトに掲載された実施報告です。2014 年度は 4 回実施しました。

### 第 9 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- 題 目：科学報道と社会
- 講演者：元村 有希子 氏（毎日新聞デジタル報道センター編集委員）
- 日 時：2014 年 5 月 29 日（木）18：00～19：30
- 場 所：大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

2014 年 5 月 29 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構スチューデントコモンズ 2 階セミナー室 2 にて、第 9 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を開催しました。

今回は、毎日新聞デジタル報道センター編集委員の元村有希子氏をお招きし、「科学報道と社会」というタイトルでご講演頂きました。

科学報道と社会、その関係が現在ほど問われている時はないかもしれません。ご講演ではまず、ご自身の科学環境部記者としての経験、とくに科学欄の連載企画「理系白書」において、日本の科学技術の現場を多様な切り口から分かりやすく伝えようとしてきたことをお話しされました。日本の科学ジャーナリズムの歴史や現状についてもお話しされ、第二次世界大戦後、1954 年 3 月の第五福竜丸の被爆によって発展し、2011 年 3 月の東日本大震災と原発事故によって大きな変化を経験したという指摘は興味深いものでした。また、取材・報道手段としてのフェイスブックやツイッターの有効性に関する指摘も、現状を再認識させるものでした。さらに、有名な絵画を題材に、ジャーナリストやジャーナリズムのあり方を説明された後、参加した大学研究者や学生と一つ一つ丁寧に対話をされる様子が印象的でした。



## 第10回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○題 目：原子力と社会～福島事故を踏まえて～

○講演者：鈴木 達治郎 氏

(長崎大学核兵器廃絶研究センター 副センター長・教授、前内閣府原子力委員会委員長代理)

○日 時：2014年6月27日(金) 18:00～20:00

○場 所：大阪大学 21世紀懐徳堂スタジオ

2014年6月27日(金)に、大阪大学21世紀懐徳堂スタジオにて、第10回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会(STiPS Handai 研究会)を開催しました。

今回は、長崎大学核兵器廃絶研究センター副センター長・教授、前内閣府原子力委員会委員長代理の鈴木達治郎先生をお招きし、「原子力と社会～福島事故を踏まえて～」というタイトルでご講演頂きました。

2011年3月の東日本大震災と原発事故から3年が過ぎ、現在もさまざまな問題と格闘中ですが、ようやく少し冷静に客観的に振り返ることができるようになったのかもしれません。ご講演では、原子力・核技術の二面性、福島原発事故の教訓と意義、原子力のリスクと社会、国民の信頼回復に向けて何をすればよいのか?、核軍縮・不拡散問題への取り組みについてお話しされ、まさに日本社会が福島原発事故とどのように向き合ってきたかを総括するものでした。

第10回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会  
(STiPS Handai 研究会)

STiPS

原子力  
と  
社会

研 究 会

「福島事故を踏まえて」(仮)

鈴木 達治郎 氏  
長崎大学核兵器廃絶研究センター  
副センター長・教授  
前内閣府原子力委員会委員長代理

2014年6月27日(金)  
18:00～20:00

大阪大学 豊中キャンパス  
大阪大学 21世紀懐徳堂 スタジオ

参加無料 事前申し込み不要  
お問い合わせ先: [stips-staff@csd.osaka-u.ac.jp](mailto:stips-staff@csd.osaka-u.ac.jp)  
※講演タイトルは、変更する可能性があります。



## 第 11 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- 題 目：今後の科学技術イノベーション政策の方向性と「夢ビジョン 2020」
- 講演者：齊藤 卓也 氏 文部科学省大臣官房政策課評価室室長  
(併)科学技術改革タスクフォース戦略室長  
(併)文部科学省 2020 年東京オリンピック・パラリンピック 競技大会準備本部  
夢ビジョン 2020 実現プロジェクトチーム 副チームリーダー
- 日 時：2014 年 7 月 10 日 (金) 18:00～19:30
- 場 所：大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室 2

2014 年 7 月 10 日 (金) に、大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構ステューデントコモンズ 2 階セミナー室 2 にて、第 11 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会) を開催しました。

今回は、文部科学省大臣官房政策課評価室室長の齊藤 卓也 氏 (併・科学技術改革タスクフォース戦略室長、併・文部科学省 2020 年東京オリンピック・パラリンピック 競技大会準備本部夢ビジョン 2020 実現プロジェクトチーム副チームリーダー) をお招きし、「今後の科学技術イノベーション政策の方向性と『夢ビジョン 2020』』というタイトルでご講演頂きました。

ご講演では、現在の日本の科学技術イノベーション政策が置かれている状況として、国家財政や科学技術の危機的状況を説明された後、客観的根拠に基づく合理的な政策形成が求められているとして、STiPS を含めた「政策のための科学」の推進を取り上げられました。

また、文部科学省官房戦略室の取り組みとして、日本の将来像から導かれる科学技術政策の策定、すなわち、あるべき姿とバックキャストの議論を主導して省内の政策議論を活性化する試みを紹介されました。さらに、文部科学省内の「夢ビジョン 2020」という取り組みとして、2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催を、日本の将来に向けた変化の大きなうねりとし、多くの人が夢を語り、日本人・日本社会のバージョンアップ、ライフスタイルの変革につなげていく好機とすべきという提言を紹介されました。



## 第12回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- 題 目：宇宙政策とコミュニケーション
- 講演者：山崎 直子 氏（宇宙飛行士、内閣府宇宙政策委員会委員）
- 日 時：2014年11月28日（金）13：30～15：30
- 場 所：大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ

2014年11月28日（金）に、大阪大学豊中キャンパス21世紀懐徳堂スタジオにて、第12回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）を、大阪大学法学会との共催で開催しました。

今回は、宇宙飛行士で内閣府宇宙政策委員会委員の山崎直子氏をお招きし、「宇宙政策とコミュニケーション」というタイトルでご講演頂きました。

まず司会進行が、日本の宇宙政策が現在大転換期にある説明として、内閣府の宇宙政策のホームページ、宇宙関係予算、宇宙基本法、宇宙基本計画、新・宇宙基本計画（素案）の意見募集、世界と日本の宇宙政策の変遷（年表）について概説した後、山崎様のご講演と質疑応答が行われました。

山崎様のご講演では、宇宙とは何か、宇宙飛行士として搭乗した米国のスペース・シャトルや滞在した国際宇宙ステーション（ISS）の説明、日本の宇宙政策の現状、宇宙飛行士による有人宇宙計画の意義、宇宙飛行士の訓練やISS組立ミッションにおけるコミュニケーションの重要性、そして宇宙から撮影した写真などについて、宇宙や宇宙政策に関して初心者でもわかるように丁寧に説明されました。

質疑応答では、宇宙飛行士になった動機や苦労した場面、日本の宇宙予算（約3000億円）や有人宇宙計画予算（約350億円）についての賛否、米国はアポロ計画で1969年から1972年にかけて本当に月に行ったのか、宇宙に関係する文系人材、ISS内や月面上での法律（国際宇宙法）など、多岐にわたる質問が出されました。山崎様はそれら一つ一つに熱心にお答えになり、最後に、「今後の宇宙政策や有人宇宙計画については、もっともっと話し合っていきたい」、「宇宙は私たちの故郷であり、私たちは宇宙の子である」というメッセージで終わられました。

会場は学生や教職員で満たされ、研究会終了後、「参加することができて本当に満足です」、「宇宙政策に対する理解が深まりました」、「今後もこのような宇宙政策に関する研究会に参加してみたい」という声がたくさん寄せられました。



## 🍷 RISTEX 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）

国立研究開発法人・科学技術振興機構（Japan Science and Technology Agency; JST）社会技術研究開発センター（Research Institute of Science and Technology for Society; RISTEX）、戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム、平成 25 年度（2013 年度）企画調査「医療健康情報の一元化と社会実装に向けた基盤研究」（代表研究者・中山健夫、京都大学・教授）を実施し、滋賀県長浜市・兵庫県神戸市の両地域において、共通 ID の医療利用、疫学研究の還元法について行政・市民と熟議を進めました。

詳細は、RISTEX 平成 25 年度企画調査終了報告書及び資料（2014 年 4 月 3 日、[http://www.ristex.jp/examin/stipolicy/pdf/H25houkoku\\_nakayama\\_1.pdf](http://www.ristex.jp/examin/stipolicy/pdf/H25houkoku_nakayama_1.pdf)）を参照ください。

## 5. 関西ネットワークの発展

---

## 5. 関西ネットワークの発展

### ❖ ラボカフェ

ラボカフェとは、大阪大学が社会の様々な組織や個人とのコラボレーションを通じて、主題に応じた対話を繰り広げる社会学連携事業です。平日夜を中心に、哲学、アート、サイエンス、減災、医療等、多岐に渡るテーマに基づき、対話、レクチャー、アートイベント等の様々なプログラムを実施しています。

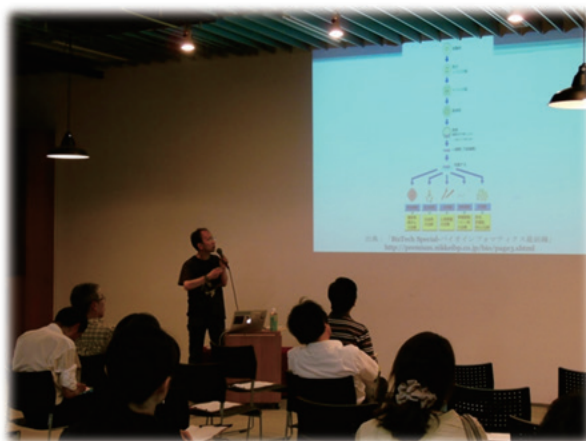
STiPS では、科学技術が社会にとってより良いものとして発展していく条件とは何か？ 各界で活躍するフロントランナーをお招きし、「社会の中のイノベーション」という観点から刺激的な時を共有する「シリーズ：科学技術イノベーション」を昨年度に引き続き、2014年度は4回開催しました。

#### 「シリーズ：科学技術イノベーション」第10回開催

- 日時：2014年7月15日（火）19:00～21:00
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1F コンコース）
- 定員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- ゲスト：粥川 準二 氏（科学ジャーナリスト、東京海洋大・明治学院大非常勤講師）
- タイトル：生命科学の研究倫理
- カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

CSCD のレクチャー&対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第10回「生命科学の研究倫理」を開催いたしました。

ゲストは科学ジャーナリストで大学非常勤講師の粥川準二さん。



タイトルは「生命科学の研究倫理」です。最近注目を集めている「生命科学の研究倫理」をテーマに、いわゆる「STAP細胞」の問題の概略や歴史的経緯について解説がなされ、これまでの報道等ではあまり扱われてこなかった、ELSI的側面について話し合われ、参加者も含めて突っ込んだやりとりがなされました。「大変に興味深く、今後の問題の理解に役立つものだった」といった声が多数寄せられました。



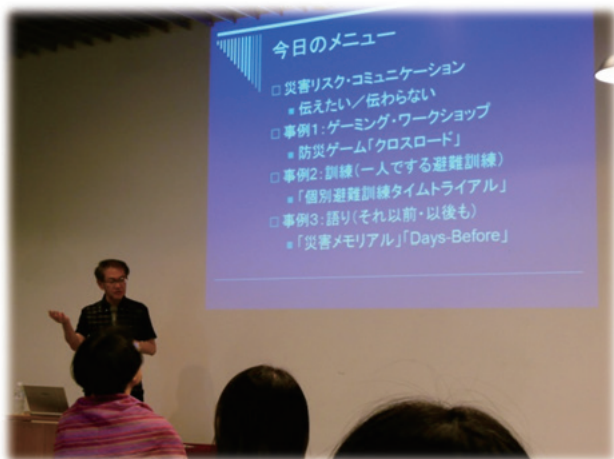
## 「シリーズ：科学技術イノベーション」第11回開催

- 日 時：2014年9月9日（火）19:00～21:00
- 場 所：アートエリア B1（大阪市北区中之島 1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下 1F コンコース）
- 定 員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- ゲスト：矢守克也（京都大学防災研究所・巨大災害研究センター教授）
- タイトル：災害情報のコミュニケーション
- カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
- 主 催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

CSCD のレクチャー&対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第11回「災害情報のコミュニケーション」を開催いたしました。

ゲストは京都大学防災研究所の矢守克也さん。すでに「311 後」の時代を生きる我々が、災害情報をどう読み解き、いかなるコミュニケーションを行うべきか、お話を伺い議論しました。

「心理学の先生が地震津波というものをとらえた視点はとても新鮮で良かったと思います」、「動画あり、フロアとの意見交換もあり、充実した内容でした。どのアプローチもとても工夫されており、大変に面白かったです」、「毎回考えさせられる話題ですが今回は特に心を揺さぶられる話だったと思います」、「私は介護問題を色々扱っておりまして、これから高齢者介護問題についてもいろいろなシミュレーションが必要だと思っています。とても参考になりました」という声や、「会場に近い大阪中心部をテーマとした津波災害の避難シミュレーションなどをやってもらえたらありがたい」という声がありました。



## 「シリーズ：科学技術イノベーション」第12回開催

- 日時：2014年11月20日（木）19:00～21:00
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1Fコンコース）
- 定員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- ゲスト：牧慎一郎（大阪市立天王寺動物園・改革担当部長）
- タイトル：科学コミュニケーションとイノベーション
- カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

CSCD のレクチャー&対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第12回「科学コミュニケーションとイノベーション」を開催いたしました。

今回は、天王寺動物園の改革担当部長に今年、公募で就任した「TV チャンピオン・全国動物園王選手権」優勝者にして元文部科学省の役人、牧慎一郎さんをゲストにお迎えし、ご講演いただきました。

前半と後半では内容がガラリと変わり、今までにない雰囲気、「とても楽しくおもしろかったです」、「これからもいろいろな企画モノを期待しています」という声をいただきました。牧さんもこの日のためにたくさんのお話を考えてきてくださったようで、お話が尽きませんでした。



「シリーズ：科学技術イノベーション」第13回開催

- 日時：2015年3月30日（月）19:00～21:00
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1Fコンコース）
- 定員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- ゲスト：藤城眞（財務省大臣官房審議官）
- タイトル：高齢化社会とソーシャルイノベーション
- カフェマスター：神里達博（大阪大学 CSCD 教員）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS、大阪大学・京都大学連携プログラム）

## 🍷 京大拠点主催：政策のための科学イベント

### 関西への出向行政官との連携

2015年2月17日（火）に京都大学政策のための科学ユニット教室にて「中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会」を行いました。中央省庁からの関西への出向行政官6名と京都大学からは7名が参加しました。参加者からは講義の提供などを通して、出向行政官と教員・学生の交流をより図っていくことが提案されました。また、関西へ出向している行政官のネットワークの構築に向けて、今後も継続的に本勉強会を開催することで一致しました。

### 研究会：「予防医学とはなにか」ソーシャルデザインの未来からの視点

2014年10月23日（木）16:30～18:30

講師：飯島ツトム（ブランディングプロデューサー）

京都大学医学部G棟の政策のための科学の部屋にて、ブランディングプロデューサーの飯島ツトム氏をお招きし、『「予防医学とはなにか」ソーシャルデザインの未来からの視点』というタイトルでご講演いただきました。

ご講演は、ご自身のブランディングプロデューサーとしての経験、とくに現在取り組まれている健康促進アプリの開発の経緯を例に、ブランドを構築しつつ、そこに新たなイノベーションを起こす仕掛け人としてのご経験を交えたお話でした。ファッション業界で長年培われた経験を、健康と美容の側面から、新たなイノベーションとともに社会に挑戦されているリアルトークで、健康とイノベーションの現場を多彩な切り口からわかりやすくご説明いただきました。参加した大学研究者や学生も飯島氏の話に引き込まれ、質疑応答が活発に行われました。

### 研究会：「職域で広がる予防の現状」

2014年11月18日（火）16:30～18:30

講師：木村真也（(株)日本医療データセンター代表取締役会長）

京都大学医学部G棟の政策のための科学の部屋にて、株式会社日本医療データセンター代表取締役会長の木村真也氏をお招きし、「職域で広がる予防の現状」というタイトルでご講演いただきました。

ご講演では、まずデータヘルス計画の現状についての最新情報を共有くださいました。ターゲットとして目指すべき社会システムの姿として、生活習慣病等の慢性期医療にかかる費用を、予防・疾病管理にシフトすることにより、健康寿命を延ばし、健康で長生きできる社会を提示されました。具体的には、公的保険外の運動・食事指導サービス等により、国民のGOLの向上を図り、個人の一生に係る医療費総額を抑制するといったお話を頂きました。参加した大学研究者や学生と、質疑応答が活発に行われました。

## 6. 国際連携の推進

---

## 6. 国際連携の推進

### ❖ 国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2014年度には、次の4点の活動を行うことができました。

ア) 「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation; RRI)」に関する国際的ネットワーク機関 (VIRI) への加盟について

近年の EU の科学技術イノベーション政策の柱の一つである「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に代表されるように、先進諸国では、科学技術の発展が社会に適切に埋め込まれるために必要な多様なアクターの相互作用のあり方に関する研究の進展が重視されているこうした問題意識のもと、米国アリゾナ州立大学が「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation (VIRI)」を構築しました。2014年6月、本拠点 STiPS は、審査の上、同国際ネットワーク VIRI に正式に加盟が認められた。2015年3月現在、欧州、アジア、南米、中東などの世界各地から 20 拠点が VIRI に加盟しているが、日本からは本拠点 STiPS のみが加盟しています (<https://cns.asu.edu/viri/partners>)。

今後、責任ある研究・イノベーションに関して取り組む海外拠点を訪問調査し、同分野の発展に向けた人文・社会科学分野の貢献のあり方を分析することで、イノベーション人材育成の現状と課題を明らかにすることが重要です。さらに、日本の人文・社会科学分野による貢献方法のあり方を検討した上で、その結果を本拠点の教育カリキュラム内容の拡充に反映するとともに、国内の他の人材育成拠点に共有していきます。また、そうした成果を海外拠点に発信することで、国際連携を一層強化していきます。

イ) ミュンヘン工科大学 (TUM) ミュンヘン社会技術センター (MCTS) との連携強化について

2013年と2014年、2年続けてミュンヘン工科大学から招待講演を依頼されましたが、同時に、同大学との連携強化を図りました。具体的には、2013年11月、ミュンヘン工科大学ミュンヘン社会技術センター (Munich Center for Technology in Society; MCTS) のセンター長 Klaus Mainzer 教授にインタビュー調査を行い、MCTS の設立経緯と特徴について知見を得ました。MCTS は、科学、技術、社会のインターフェースを形成するという点で、本拠点の教育研究プログラムと共通する点が多くありました。そのため、本教育プログラムに MCTS の取り組みなどを反映すべく、独語の MCTS のシラバスを翻訳し、MCTS のカリキュラムを精査しました。また、社会とのコミュニケーションに関する研究と教育を進める MCTS とは、今後、教育研究面での連携を深めていくことで協議を開始しました。連携の具体的な案として、本教育プログラム学生の派遣と、MCTS が提供する教育プログラムの学生の受入などの人材交流があがりました。2014年11月には、そのフォローアップを行い、その他の欧州とアジア各地で同様な人材育成プログラムを行っている大学拠点との連携強化について意見交換を行いました。

#### ウ) 国際的な共同研究について

2014年4月のリヨン第三大学における招聘講演の際、主催者であるリヨン第三大学教授アラン＝マルク・リユー (Alain-Marc Rieu) 氏と、科学技術政策やエネルギー政策、今後の大学のあり方などについて、意見交換を行いました。またリユー教授らが準備している書籍の一章に、寄稿する件に関する議論、打ち合わせも行いました。今後、2015年9月から2016年4月まで、独立行政法人国際交流基金 (The Japan Foundation) ・日本研究フェローシップ (2015年度採択、研究題目「科学技術とイノベーション論の地政学的研究」) によって、科学技術政策を専門とする同リユー教授を招聘し、欧州、日本、アメリカ、中国などのイノベーション政策の比較をテーマとした共同研究を開始する予定です。

#### エ) 海外からの調査団来訪

2014年7月台湾の文部科学省の委託による国立台湾大学などからなる調査団一行が大阪大学コミュニケーションデザイン・センターを訪問し、本拠点 STiPS の人材育成プログラムなどに関し、インタビューと意見交換を行いました。台湾をはじめとするアジア各地における科学技術領域拠点との連携強化を見据え、今後とも本拠点の教育研究活動の特色を発信する予定です。

#### ❖ 海外調査及び発表等

2014年4月には、小林傳司 (大阪大学・教授) と神里達博 (大阪大学・特任准教授) が、リヨン第三大学で行われた国際シンポジウム「Fukushima : le politique après la catastrophe Epistémologie, philosophie, théorie sociale et politique」に参加し、福島後のエネルギー問題政策形成に関する講演を行うとともに、参加した日仏の研究者と活発な議論を行いました。

9月には、渡邊浩崇 (大阪大学・特任講師) が、米国ワシントン DC におけるジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策センター・宇宙政策研究所やウィルソン・センター (Woodrow Wilson International Center for Scholars) を訪問し、またカナダ・トロントにおいて開催された国際宇宙会議 (IAC) の宇宙政策、宇宙航行史、宇宙法などのセッションに参加して、科学技術政策や宇宙政策に関する研究や教育の欧米における現状を調査しました。





## 7. 政策のための科学に関連する活動

---

## 7. 政策のための科学に関連する活動（研究業績等）

2014年度の政策のための科学に関連する活動のリストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

### ❖ 大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 28 ページ参照）構成員の「政策のための科学」に特に関連する活動について掲載いたしました。

#### 著書、論文等

- 小林傳司. 2015. 「文系と理系、科学と工学」, 『科哲』(東大科哲の会誌), 第 16 号, 2015 年 1 月 1 日, 2-6 頁.
- 小林傳司. 2015. 「第一部 討論に参加」, 「第二部 知の構造転換と大学の役割」, 山脇直司編『科学・技術と社会倫理』東京大学出版会, 175-190 頁.
- 平川秀幸. 2014. 「BSE リスク評価との比較から見える再稼働問題の重要論点」, 『科学』2014 年 9 月号 (Vol. 84, No. 9), 940-941 頁.
- 平川秀幸. 2014. 「科学における『公共性』をいかにしてつくり出すか……統治者視点/当事者視点の相克」, 公益財団法人たばこ総合研究センター編『談 100 号記念選集』, 水曜社, 204-222 頁.
- 平川秀幸. 2014. 「科学的助言のパラダイム・シフト—責任あるイノベーション, ポスト・ノーマルサイエンス, エコシステム」, 『科学』2014 年 2 月号 (Vol. 84, No. 2, 特集「科学的助言: 科学と行政のあいだ」), 195-201 頁. (Hideyuki Hirakawa. 2014. “Paradigm Shift in Scientific Advice: Responsible Innovation, Post-Normal Science, and Ecosystemic Approach,” Discuss Japan, No. 23, Dec 18, 2014.)
- 平川秀幸. 2014. 「『専門知の民主化/民主政の専門化』モデルと 3・11 複合災害後の日本」, 『社会思想史研究』No.38, 〈特集〉社会思想としての科学, 43-65 頁.
- 神里達博. 2014. "Creating a Hub for ELSI/TA Education, Research and Implementation in Japan" pp. 117-122. (Eds.: TOMÁŠ MICHALEK, LENKA HEBÁKOVÁ, LEONHARD HENNEN, CONSTANZE SCHERZ, LINDA NIERLING AND JULIA HAHN, Author: Tatsuhiro KAMISATO, Mitsuaki HOSONO) Technology Assessment and Policy Areas of Great Transitions, Prague: Technology Centre ASCR. 2014 年 11 月.
- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険(陽の巻・最終回)「時代とは何なのか」, 『本』(講談社), Vol. 39 (12), 24-31 頁, 2014 年 12 月.
- 神里達博. 2014. 科学家のテラス 「(3) 研究生生活の困難は思わぬところに・・・」, 『5』, Vol. 1, 122 頁, 2014 年 12 月.
- 神里達博. 2014. 科学家のテラス 「(2) 工学部・研究室時代の興奮」, 『5』, Vol. 1, 116 頁, 2014 年 12 月.

- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険 (陰の巻) 「時代と身体」, 『本』 (講談社), Vol. 39 (11), 22-29 頁, 2014 年 11 月.
- 神里達博. 2014. 社会の中の科学者のすがたを等身大に描き出す報道を, 『Journalism』, Vol. 291, 62-69 頁, 2014 年 8 月.
- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険 (亥の巻) 「世界を支配する『べき乗則』」, 『本』 (講談社), Vol. 39 (8), 26-33 頁, 2014 年 8 月.
- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険 (戌の巻) 「歴史とは何だ?」, 『本』 (講談社), Vol. 39 (7), 28-35 頁, 2014 年 7 月.
- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険 (酉の巻) 「科学を推進するエンジン」, 『本』 (講談社), Vol. 39 (6), 26-33 頁, 2014 年 6 月.
- 神里達博. 2014. 科学家のテラス 「(1) そもそも科学家とは・・・」, 『5』, Vol. 1, 107 頁, 2014 年 6 月.
- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険 (申の巻) 「芸術は文明を先駆ける」, 『本』 (講談社), Vol. 39 (5), 26-33 頁, 2014 年 5 月.
- 神里達博. 2014. 文明探偵の冒険 (未の巻) 「関東大震災の予言的中! ?」, 『本』 (講談社), Vol. 39 (4), 24-31 頁, 2014 年 4 月.
- 神里達博. 2015. (月刊安心新聞) 少年犯罪への視線 揺らぐ「子供」という概念 神里達博さん, 『朝日新聞』, 2015 年 3 月 19 日, 朝刊 15 面.
- 神里達博. 2015. (月刊安心新聞) ジャーナリズムと行政 「公正中立幻想」の危うさ 神里達博さん, 『朝日新聞』, 2015 年 2 月 19 日, 朝刊 17 面.
- 神里達博. 2015. (未来への発想委員会) 経済成長を問い直す: 下, 『朝日新聞』, 2015 年 1 月 24 日, 朝刊 17 面.
- 神里達博. 2015. (月刊安心新聞) 食のリスクとメディア 「実在の危険」見極める難しさ 神里達博さん, 『朝日新聞』, 2015 年 1 月 15 日, 朝刊 15 面.
- 神里達博. 2014. (月刊安心新聞) 火山の噴火 「認識の限界」に折り合う心構え 神里達博さん, 『朝日新聞』, 2014 年 12 月 18 日, 朝刊 15 面.
- 神里達博. 2014. (月刊安心新聞) 不安の源 豊かさを求めた末のリスク 神里達博さん, 『朝日新聞』, 2014 年 11 月 20 日, 朝刊 19 面.
- 神里達博. 2014. (未来への発想委員会) 政党政治を問い直す: 下, 『朝日新聞』, 2014 年 7 月 10 日, 朝刊 13 面.
- Hiroataka Watanabe. 2014. "Japanese Space Policy during the 1970s: A Road to Autonomy by Modifying the Japan-U.S. Space Cooperation Agreements," *History of Rocketry and Astronautics, American Astronautical Society (AAS) History Series, Volume 42* (San Diego, CA: Univelt, Inc.), pp. 153-180.
- Hiroataka Watanabe. 2014. "The Space Policy of the Nixon and Ford Administrations: Another Detente Diplomacy through Project Apollo and ASTP," *History of Rocketry and Astronautics, American Astronautical Society (AAS) History Series, Volume 41* (San Diego, CA: Univelt, Inc.), pp. 217-232.

## 社会貢献

- 小林傳司. (独) 科学技術振興機構, 上席フェロー・科学コミュニケーションセンターアドバイザー.
- 小林傳司. 日本学術会議連携会員 (第一部).
- 小林傳司. 文部科学省安全・安心科学技術及び社会連携委員会, 委員.
- 平川秀幸. 文部科学省科学技術コミュニケーションの推進方策に関するタスクフォース (2014年12月～2015年3月).
- 平川秀幸. 文部科学省産業連携・地域支援部会イノベーション対話促進作業部会委員 (2013年3月～2015年3月).
- 平川秀幸. 滋賀県原子力防災専門家会議委員 (2013年4月～2014年5月).
- 平川秀幸. 文部科学省安全・安心科学技術及び社会連携委員会リスクコミュニケーションの推進方策に関する検討作業部会委員 (2013年4月～2015年3月).
- 平川秀幸. 大阪いずみ市民生活協同組合理事 (2013年6月～現在).
- 神里達博. 科学技術社会論学会・学会誌・編集委員 (2008年11月～現在)
- 神里達博. 朝日新聞社「未来への発想委員会 (旧ガバナンス懇談会)」委員 (2013年4月～現在).
- 神里達博. 朝日新聞社・客員論説委員(継続 (2014年4月～)).
- 渡邊浩崇. 国際学術雑誌『宇宙政治 (*Astropolitics: The International Journal of Space Politics & Policy*)』, 編集委員, 2012年～現在.

## アウトリーチ活動等

- 小林傳司. 2015. 天文教育フォーラム「トランス・サイエンスの時代」のパネリストとして登壇, 天文学会 (大阪大学豊中キャンパス), 2015年3月18日.
- 小林傳司. 2015. 「科学・技術と社会—3.11以後に考えるべき問題」(招待), (株)原子力安全システム研究所社会システム研究所, 2015年1月26日.
- 小林傳司. 2015. 「(リスク) コミュニケーションの可能性と課題」(招待), 資源エネルギー庁トリチウムタスクフォース, 2015年1月21日.
- 小林傳司. 2014. 「拡大する科学者の責任—ピアから社会へ」(招待), 九州大学第三回 STI 政策シンポジウム「研究倫理と科学への信頼」, 博多都ホテル, 2014年12月15日.
- 小林傳司. 2014. 「原発再稼動と電気料金値上げ エネルギー政策明示を」(関西経済の争点 2014 衆院選), コメント, 『毎日新聞』, 2014年12月5日.
- 小林傳司. 2014. 「Transdisciplinary Research と Public Engagement」(招待), Future Earth/Transdisciplinary 勉強会, 国立環境研究所, 2014年10月24日.
- 小林傳司. 2014. 「パブリックコンサルテーションの可能性」(招待), 日本学術会議「原子力利用の将来像についての検討委員会」, 日本学術会議, 2014年9月25日.
- 小林傳司. 2014. 「科学・技術と社会: 3.11以後に考えるべき問題」(招待), アスペン研究所「科学・技術とヒューマニティ」セミナー, セミナーハウス クロス・ウェーブ府中, 2014年5月31日.
- Tadashi Kobayashi. 2014. *Deliberative Poll on the national energy policy in 2012 and the aftermath* (Invited), FUKUSHIMA+3, le politique apres la catastrophe: epistemologie/philosophie/politique,

Universite Jean Moulin Lyon, 3-4 Avril 2014.

- 小林傳司, 八木絵香, 山内保典 (編). 2014. 「Lesson Learning : 2012 年夏のエネルギー・環境の選択肢に関する国民的議論とは何だったのか これからの「政策形成あり方」を考える 実施報告書」  
<http://stips.jp/wp-content/uploads/791f648d0f0f7e40d6039af1a61e8235.pdf>
- 神里達博. 2014. 科学技術社会論の観点から, JST/CRDS 「WS 知のコンピューティングと ELSI/SSH」  
[招待講演] (東京・JST 東京事務所), 2014 年 9 月.
- 神里達博. 2014. 原子力と社会—不確実性と大飯判決, 日本学術振興会・先導的研究開発委員会「原子力は未来技術たりえるか」[招待講演] (東京・堀場製作所東京支社), 2014 年 7 月.
- 神里達博. 2014. How to formulate an energy policy? "Fukushima : le politique apres la catastrophe/Epistemologie, philosophie, theorie sociale et politique," Lyon, 2014 年 4 月.
- 神里達博. 2015. 今だから! リスクコミュニケーション—食の安全…あなたは何を信頼しますか?—,  
「くらしフェスタ東京 2014・特別企画」(東京都消費者月間実行委員会事務局, 東京・ウィメンズプラザホール), 2015 年 2 月.
- 神里達博. 2015. リスク社会を生きる, 「サントリー安全性勉強会」[招待講演] (サントリー, 東京・サントリーワールドヘッドクォーター), 2015 年 1 月.
- 神里達博. 2015. リスクと向き合う—フレミングと自由, 「談話会」[招待講演] (日本たばこ産業 (JT), 東京・JT 本社), 2015 年 1 月.
- 神里達博. 2014. 話題提供 2 : 科学技術庁 (現文部科学省) を経験して、研究の道に進む, 「第七回科学技術政策セミナー」[パネラー] (大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室, 大阪・大阪大学吹田キャンパス), 2014 年 7 月.
- 神里達博. 2014. (耕論) 大飯原発判決を読む 神里達博さん、澤昭裕さん、海渡雄一さん, 『朝日新聞』, 2014 年 7 月 16 日, 朝刊 15 面.
- 神里達博. 2014. 判決は何を問いかけたのか 大飯原発差し止め訴訟, 『かんさい熱視線』(NHK 大阪・総合テレビ), 2014 年 5 月 30 日放送.
- 山内保典, 八木絵香. 2014. 「気候変動リスク管理における『市民』の役割」, 『科学技術社会論学会第 13 回年次研究大会予稿集』 25-26 頁. 大阪大学豊中キャンパス, 2014 年 11 月 15 日・16 日 (口頭).
- 山内保典. 「研究者にとっての Transferable skills training」, 奈良女子大学 教職員研修会にて講演, 奈良女子大学, 2014 年 11 月 17 日.
- 渡邊浩崇. 2015. 「宇宙からみた地球の多文化共生時代を展望する」, 平成 26 年度国際交流人材養成講座 (多言語の取り組みアラカルト 2 回目), 公益財団法人・大阪国際交流センター, 2015 年 3 月 12 日.
- 渡邊浩崇. 2014. 「日本の宇宙政策過程の歴史と現状」, 第 58 回宇宙科学技術連合講演会, セッション OS24-1 「宇宙開発利用のビジョンと法政策～国内外の最新動向～」, 2014 年 11 月 14 日.
- 辻田俊哉. 2015. 「シリーズ: 適正技術」ワークショップ (司会・進行等, 計 5 回) 2015 年 2 月 22 日～23 日, 2015 年 1 月 22 日, 2014 年 11 月 20 日, 2014 年 11 月 8 日, 2014 年 7 月 2 日.
- 辻田俊哉. 2014. 「グローバル語り部」講演会, 兵庫県立明石城西高等学校, 9 月 11 日.

## 京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の政策のための科学に関係する活動について掲載いたしました。

### 著書、論文等

- 川上浩司. 2014. 「医療分野における疫学研究によるビッグデータ解析事例」, 『ビッグデータの収集、調査、分析と活用事例』, 技術情報協会, 245-248頁.
- 川上浩司. 2014. 「製品種別ごとのデータ・情報の取得とまとめ方のポイント：核酸医薬, 遺伝子治療薬, 細胞治療薬における留意点」, 『医薬品/医療機器の承認申請書の上手な書き方・まとめ方・審査に不可欠なデータ・情報の取得の仕方』, 技術情報協会, 346-348頁.
- 川上浩司. 2014. 「薬剤疫学の課題と展望」「比較有効性研究」, 井村裕夫監修『臨床研究のススメ』, 最新医学社, 141-146頁, 185-192頁.
- 川上浩司. 2014. 「外科領域における Health Technology Assessment」(錦織 達人, 川上 浩司, 後藤 励, 肥田 侯矢, 坂井 義治) 日本外科学会雑誌, 第116巻第1号, 64-69頁.
- 川上浩司. 2015. 医療技術評価(世界医学サミット(WHS)京都会合2015のトピックス), 医療レジエンス: 医学アカデミアの社会的責任(編集代表・福原俊一), 医学書院, 82-89頁.
- 川上浩司. 2014. 「心血管イベントの一次予防としてのスタチンの費用対効果研究と政策応用」(大西 佳恵, 川上 浩司), 医薬ジャーナル, 50(11), 111-115頁.
- 川上浩司. 2014. 「医療技術と薬剤の評価に関する国際動向」 血液内科, 68(4), 548-551頁.
- 川上浩司. 2014. 「医療や看護における臨床及び経済評価」日本糖尿病教育・看護学会誌, 18(1), 56-59頁.
- 川上 浩司. 2014. 「分子標的薬・コンパニオン診断薬の医療技術評価の現状と課題(登壇企画: コンパニオン診断-診断薬開発から承認審査、臨床応用へ)」(村田 京子, 川上 浩司), 医学のあゆみ, 248(11) 857-860頁.
- 川上浩司. 2014. “Statistical issues in observational studies in oncology in the era of big data”, (Shiro Tanaka, Sachiko Tanaka, and Koji Kawakami). Japanese Journal of Clinical Oncology, in press.
- 川上浩司. 2014. “The contribution of pharmaceuticals in the history of organ transplantation”, (Yoko Uryuhara and Koji Kawakami). Pharmaceutica Analytica Acta, 5: 277. doi: 10.4172/2153-2435.1000277.
- 川上浩司. 2014. “Utilization of antipsychotic drugs in elderly patients with Alzheimer's disease in ambulatory practice in Japan”, (Hisashi Urushihara, Shingo Kobayashi, Yasuyuki Honjo, Shinji Kosugi, and Koji Kawakami). Science Postprint, 1(1): e00014. doi:10.14340/spp.2014.01C0003.
- 川上浩司. 2014. “Antimetabolic efficacy and safety of a combination of palonosetron, aprepitant and dexamethasone in patients with testicular germ cell tumor receiving 5-day cisplatin-based combination chemotherapy”, (Shota Hamada, Shiro Hinotsu, Koji Kawai, Shigeyuki Yamada, Shintaro Narita, Koji Yoshimura, Hiroyuki Nishiyama, Yoichi Arai, Tomonori Habuchi, Osamu Ogawa, and Koji Kawakami). Supportive Care in Cancer, 22: 2161-2166.
- 川上浩司. 2014. “Prescription patterns and trends in anti-rheumatic drug use based on a large-scale claims database in Japan”, (Hiroataka Katada, Naoichiro Yukawa, Hisashi Urushihara, Shiro

- Tanaka, Tsuneyo Mimori, and Koji Kawakami). *Clinical Rheumatology*, doi 10.1007/s10067-013-2482-1.
- 川上浩司. 2014. “Current environment for conducting clinical researches with medical devices in hospitals in Japan”, (Shota Hamada, Yukie Yamauchi, Osamu Miyake, Motoko Nakayama, Haruko Yamamoto, and Koji Kawakami). *Journal of Clinical Trials*, 4: 153. doi:10.4172/2167-0870.1000153.
- 川上浩司. 2014. “Transaction cost analysis of new drug application affairs in Japan: a case study of a multinational pharmaceutical company”, (Shota Hamada, Akiko Shibata, Hisashi Urushihara, Shintaro Sengoku, Chihiro Suematsu, and Koji Kawakami). *Therapeutic Innovation & Regulatory Science*, 48: 371-377.
- 川上浩司. 2014. “Application of a self-controlled case series study to a database study in children”, (Hanae Ueyama, Shiro Hinotsu, Shiro Tanaka, Hisashi Urushihara, Masaki Nakamura, Yuji Nakamura, and Koji Kawakami). *Drug Safety*, 37: 259-268.
- 川上浩司. 2014. “Academic clinical trials and drug regulations in Japan: impacts of introducing the Investigational New Drug system”, (Hisashi Urushihara and Koji Kawakami). *Therapeutic Innovation and Regulatory Science*, 48: 463-472.
- 小山田耕二. 2014. “Adaptive Fused Visualization for Large-scale Blood Flow Dataset with Particle-based Rendering,” (Kun Zhao, Naohisa Sakamoto, Koji Koyamada) *Journal of Visualization*, doi:10.1007/s12650-014-0260-z.
- 小山田耕二. 2014. “Voting-based Ensemble-averaging Visualization for Water Mass Distribution,” (Kun Zhao, Satoshi Nakada, Naohisa Sakamoto, Koji Koyamada), *Journal of Visualization*, doi:10.1007/s12650-014-0258-6.
- 小山田耕二. 2014. 「可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析」(尾上洋介, 久木元伸如, 小山田耕二), *可視化情報学会論文集*, Vol. 32, No. 12, 43-51 頁.
- 小山田耕二. 2014. “Causal Relationship Analysis of Member Satisfaction in the Visualization Society of Japan” (Yosuke ONOUE, Nobuyuki KUKIMOTO, Koji KOYAMADA), *Transactions of Visualization Society of Japan*, Vol. 34, No. 12, pp. 43-51.
- 二木史朗. 2014. “Peptide-based therapeutic approaches for treatment of the polyglutamine diseases,” (Toshihide Takeuchi, H. Akiko Popiel, Shiroh Futaki, Keiji Wada, Yoshitaka Nagai), *Curr. Med. Chem.*, Vol. 21 (23), 2575-2582.
- 小寺秀俊. 2015. “Control of microtubule trajectory within an electric field by altering surface charge density” (N. Isozaki, S. Ando, T. Nakahara, H. Shintaku, H. Kotera, E. Meyhofer, R. Yokokawa\*), *Sci. Rep.*, 5, 7669.
- 小寺秀俊. 2014. “In situ velocity control of gliding microtubules with temperature monitoring by fluorescence excitation on a patterned gold thin film,” (T. Nakahara, J. Ikuta, H. Shintaku, H. Kotera, R. Yokokawa\*), *Mater. Res. Express*, 1, 045405.

- 小寺秀俊. 2014. “Tug-of-war of microtubule filaments at the boundary of a kinesin- and dynein-patterned surface,” (J. Ikuta, N. K. Kamisetty, H. Shintaku, H. Kotera, T. Kon, R. Yokokawa\*), Sci. Rep., 4, 5281.
- 小寺秀俊. 2014. “Fabrication of a perfusable glass microfluidic channel for microtubule manipulation using an electric field,” (T. Nakahara, N. Isozaki, S. Ando, N. K. Kamisetty, H. Shintaku, H. Kotera, R. Yokokawa\*), Trans. Inst. Elect. Engnr. Jpn, 134, 64-69.
- 小寺秀俊. 2013. “Microtubule Motility Powered by Dual Motor Protein System and Their Electrical Docking,” Asian J. Chem., 25, S308-S310.
- 小寺秀俊. 2014. (植田勇作, 中原佐, 寺尾京平, 高尾英邦, 下川房男, 大平文和, 小寺秀俊, 鈴木孝明), 『日本AEM学会誌』, Vol. 22, No. 2, 202-207頁.
- 二木史朗. 2014. 「細胞導入を助ける機能性ペプチド」(中瀬生彦, 二木史朗), 『化学工業』, 65(11), 884-890 頁
- 二木史朗. 2014. “Molecular Interplays Involved in the Cellular Uptake of Octaarginine on Cell Surfaces and the Importance of Syndecan-4 Cytoplasmic V Domain for the Activation of Protein Kinase C” (Ikuhiko Nakase, Katsuhiko Osaki, Gen Tanaka, Atsushi Utani, Shiroh Futaki), Biochem. Biophys. Res. Commun. Vol. 446 (4), 857-862.
- 二木史朗. 2014. “Controlling Leucine-zipper Partner Recognition in Cells through Modifications of  $\alpha$ - $g$  Interactions” (Yusuke Azuma, Tim Kükenshöner, Guangyong Ma, Jun-ichiro Yasunaga, Miki Imanishi, Gen Tanaka, Ikuhiko Nakase, Takahiro Maruno, Yuji Kobayashi, Katja M. Arndt, Masao Matsuoka, Shiroh Futaki), Chem. Commun., Vol. 50 (48), 6364-6367.
- 新山陽子. 2015. (3月掲載予定)「市民の水平的議論を基礎にした双方向リスクコミュニケーションモデルとフォーカスグループによる検証ー食品を介した放射性物質の健康影響に関する精緻な情報吟味ー」(新山陽子, 鬼頭弥生, 工藤春代, 松尾敬子) 『フードシステム研究』第21巻第4号.
- 新山陽子. 2014. 「食品選択と食農システムの未来ー食農システムの調整と心理的行動、制度の役割」『農業と経済』第80巻第4号、5-18頁.

## 社会貢献

- 川上浩司. 文部科学省 大学発新産業創出拠点推進委員会専門委員 (2013年7月～2015年3月) .
- 川上浩司. 文部科学省 リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備 推進委員会審査小委員会委員 (2012年5月～2013年3月) .
- 川上浩司. 厚生労働省 戦略研究企画・調査専門検討会 委員 (2008年12月～2014年3月) .
- 川上浩司. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター 戦略的イノベーション創造プログラム(次世代農林水産業創造技術) 書類審査専門員 (2013年4月～2014年3月、2014年7月～2015年3月) .
- 川上浩司. 独立行政法人 科学技術振興機構 革新的先端研究開発支援事業「がん治療標的探索プロジェクト」「インフルエンザ制圧を目指した革新的治療・予防法の研究開発」プログラムオフィサー (2014年6月～2015年3月) .
- 川上浩司. 独立行政法人 日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員 (疫学・予防医学) (2014年12



月～2015年11月)。

川上浩司. 独立行政法人 科学技術振興機構 国際科学技術協力推進委員 (日本-南アフリカ協力に関する国際科学技術推進委員) (2012年12月～2013年3月)。

川上浩司. 神戸市 神戸医療産業都市推進協議会医療機器等事業化促進プラットフォーム委員会委員 (2013年6月～2015年3月)。

川上浩司. 公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会 農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業 一次審査専門評価委員 (2014年2月～2015年3月)。

二木史朗. 日本ペプチド学会理事 (～2013年)。

二木史朗. 日本生化学会理事・近畿支部長 (2013年～)。

二木史朗. 日本学術振興会特別研究員等審査委員会専門委員及び国際事業委員会書面審査員 (化学領域) (2012年～2014年)。

宮野公樹. 文科省政策局「社会と科学」検討委員会 (2013年)。

宮野公樹. 文科省「科学技術と外交」委員 (2014年～)。

宮野公樹. 文科省「日本の未来を考える」委員 (2014年～)。

#### アウトリーチ活動等

川上浩司. 2015. インタビュー 編集長VISITING「医学・医療は“新医学”の時代へ：データ解析を基盤に疫学を再興」『医薬ジャーナル』, 51巻第3号 2015年3月号.

川上浩司. 2014. 「臨床現場の疑問解決こそビッグデータの出番：川上浩司教授に聞く」『日経メディカル』, 2014年12月3日.

川上浩司. 2014. 教育特集「今、緊急に必要な社会医学系の医師。最前線で治療する医師も、最先端医療を目指す医師も必要だが・・・。」『Hello!Doctor誌』, 2014年9月20日号 (vol. 68)。

川上浩司. 2014. 「関西からこれからの医療と健康を」神戸関西圏国家戦略特区指定記念セミナーパネルディスカッション。『神戸新聞』, 2014年8月24日.

川上浩司. 2014. 「社会のニーズを満たす創薬政策実現へ実情に基づく臨床疫学研究の推進は不可欠」『ドラッグマガジン』, 70-74頁, 2014年7月号.

川上浩司. 2012. 「医療ビッグデータと臨床疫学が拓く新しい医学研究の世界」中山健夫監修；21世紀医療フォーラム編『医療ビッグデータがもたらす社会変革』。日経BP社, 2014年5月12日発行.

川上浩司. 2012. 『FDAの正体 (下)』序文, 篠原出版新社, 2012年12月.

川上浩司. 2012. 「Placeboの表記・効果と本来の薬理作用」(村田 京子, 川上浩司), 『日本医事新報』, 4622 : 58-59頁, 2012年11月24日号.

川上浩司. 2012. 「高齢がん患者は日常活動性を評価して治療方針の決定を。」『日本医事新報』コメント, 4620 : 10-11頁, 2012年11月10日号.

川上浩司. 2012. 「基礎」重視の再生医療：製品化では世界に後れ。」『読売新聞』コメント, 2012年10月11日.

川上浩司. 2012. 「医療、医薬品の開発とその評価の潮流。」『福島県耳鼻咽喉科会誌』, 23 : 14-15頁.

川上浩司. 2012. 川上浩司先生に聴く。「社会における医療の役割。」『Bios』 (ライフメディコ

- ム・三和化学研究所), 1-2頁, 2012年6月号.
- 川上浩司. 2012. マイ・ウェイ・ドクター「FDAでの研究・審査の経験を新しい学問分野開拓や人材育成に活かしていく。」『リクルートドクターズキャリア誌』, 4頁, 2012年5月号.
- 川上浩司. 2012. 「Bench to Clinic.」『実験医学』30周年特別企画, Vol. 30 (8) 1320-1325頁.
- 川上浩司. 2012. 鼎談「薬剤疫学と薬の評価 日本のヘルスサービスにおける疫学データの必要性を考える」(川上浩司, 土井 脩, 木村真也)『国際医薬品情報』, 954 : 8-22, 2012年1月23日号.
- 川上浩司. 2012. 新春展望2012年「重要性増す医薬経済と費用対効果.」『日経バイオテクウェブ誌』, 2012年1月1日.
- 川上浩司. 2012. 「米国におけるワクチン政策と費用対効果.」『実験医学』, Vol. 30 (2) , 461-462頁, 2012年2月号.
- 小山田耕二. 2012. 第3回全学共通教育国際学生シンポジウム, 京都大学, 2012年11月22日.
- 小山田耕二. 2013. 第4回全学共通教育国際学生シンポジウム, 京都大学, 2013年11月22日.
- 小山田耕二. 2014. 第5回全学共通教育国際学生シンポジウム, 京都大学, 2014年11月21日.
- 小山田耕二. 2014. あしなが育英会 海外インターン生受け入れ, 2014年7月10日.
- 小山田耕二. 2014. 日本学術会議公開シンポジウム「可視化」, 日本学術会議講堂, 2014年9月22日.
- 二木史朗. 2014. 第5回「体に役立つアミノ酸・ペプチド」, ひょうご講座2014「健康サイエンス」(公益財団法人 ひょうご震災記念21世紀研究機構), 兵庫県民会館, 2014年10月14日.
- 二木史朗. 2014. 第6回「薬を患部に運ぶには?」, ひょうご講座2014「健康サイエンス」(公益財団法人 ひょうご震災記念21世紀研究機構), 兵庫県民会館, 2014年10月28日.
- 新山陽子. 2014. “Public Perception and Interactive Communication on the Health Risk of Radioactive Substances” (Y. Niiyama, Y. Kito and H. Kudo), The 57<sup>th</sup> Annual Meeting of the Japan Radiation Research Society, Kagoshima, Oct. 1, 2014.
- 新山陽子. 2014. “Structural Model of Public Perception and the Effect of Interactive Communication on the Health Risk of Radioactive substances” (Y. Niiyama, Y. Kito and H. Kudo), 2014 International Conference on Food Security and Rural Development, Nanjing, China, Oct. 18-20, 2014.
- 宮野公樹. 2015. 東北大学学際融科学研究セミナー特別講演「今日的な異分野融合への問い：思想と実践」, 2015年2月27日.
- 宮野公樹. 2015. 北陸信越工学教育協会特別講演「学問の意味と意義：学問の歴史を踏まえた工学の将来像」石川高専, 2015年2月9日.
- 宮野公樹. 2014. 「ソーシャルシネマダイアログ@関西テレビ」パネリスト登壇, 関テレWEBサイト及びビラ, 2014年12月14日.
- 宮野公樹. 2014. 朝日カルチャーセンター親子むけオープニング特別講演「改めて考える大学で学ぶということ」, 2014年9月21日.
- 宮野公樹. 2014. 「学問の細分化について」, 『日経産業新聞』「大学解剖」新聞コメント掲載, 2014年9月18日.
- 宮野公樹. 2014. 「リサーチアドミニストレーションの発展とURAの多様化」パネリスト, 日本知財学会第12回学術研究発表会, 2014年9月18日.

- 宮野公樹. 2014. 「異分野融合の研究とその活動紹介」 Nature Japanjobs にて特集記事掲載, 2014年4月24日.
- 宮野公樹. 2014. サントリー財団「科学と社会」研究会講演「科学の客観の客観 ～異分野融合における政策哲学の視座から～」, 2014年4月5日.
- 宮野公樹. 2014. 大阪大学全学FD研究会 領域横断のための対話的方法論 基調講演「今日的な『異分野融合』への問い ～学際融合教育研究推進センターの活動紹介を添えて～」, 2014年3月5日.
- 宮野公樹. 2014. 第一回 研究者メディア交流会, 演題「今日的な「メディア手法」の批判的考察～学問論の立場から個人活動を踏まえて～」, 2014年3月2日.
- 宮野公樹. 2012. 北海道大学 CoSTEP 講義「学内連携を目指した異分野融合ダイナミクス」, 2012年11月28日.
- 久木元伸如, 小山田耕二. 2015. 京都学のための科学シンポジウム「琳派とテクノロジー」, 京都ガーデンパレス, 2015年3月8日
- 久木元伸如. 2014. 評価グリッド法講習会, 京都大学百周年時計台記念館, 2014年12月19日
- 久木元伸如. 2014. データプレゼンテーション入門, 大阪ユビキタス協創広場 CANVAS, 2014年10月3日.
- 久木元伸如. 2014. ビジュアル分析オープンセミナー, 大阪イノベーションハブ, 2014年5月23日.

---

大阪大学・京都大学  
公共圏における科学技術  
活動報告 2014

2015年9月25日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)  
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16  
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)  
URL <http://stips.jp/>  
E-mail [stips-staff@cscd.osaka-u.ac.jp](mailto:stips-staff@cscd.osaka-u.ac.jp)

---



公共圏における  
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)  
Program for Education and Research on  
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]